

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・全日本中学校長会
水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

国土交通省では、水の有限性、重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和52年より、毎年8月1日を「水の日」、この日を初日とする1週間を「水の週間」として定め、様々な「水の週間」関連行事を行っております。この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

第35回を迎えました今年も、普段当たり前のように使っている水についての理解を深めるとともに、皆さんが暮らしの中で体験している水にまつわる話や身近な方から学び聞いた話などをもとに、水についての考えや今後の水の使い方についてまとめてもらう形で募集を行いました。

その結果、全国（海外を含む）の中学生から18,191編（学校数368校）もの応募がありました。今回は一昨年3月に発生した東日本大震災の経験を基に水の大切さを表現した作品のほか、家族とのコミュニケーション等を通じた日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちがよく表現されたもの等がありました。このたび、入賞作文33編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用ください。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成25年8月

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日
閣議了解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することといたしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の中旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

最優秀賞 (一編)

《国土交通大臣賞》

命の源

岩手県 滝沢村立姥屋敷中学校 二年 鈴木 綾

優秀賞 (五編)

《国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞》 未来へつなぐ水ー大切さを認識してー

茨城県 茨城町立明光中学校 二年 加藤 大河

《全日本中学校長会会長賞》 この冬のささやかな節水活動

静岡県 湖西市立白須賀中学校 三年 森田 千冬

《水の週間実行委員会会長賞》 「水の大切さ」

徳島県 阿南市立那賀川中学校 一年 川田 実央

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 ふるさとの心で守る命の水

奈良県 天川村立洞川中学校 二年 更谷 昂

《全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞》 「もつたいないを無くしたい日本。もつたいないを作らないベルギー。」

ベルギー王国 ブラッセル日本人学校 中学部 三年 園田 かのん

入選 (二十七編)

福島県	二本松市立岩代中学校	二年	安齋 茉由	8
福島県	いわき市立小川中学校	三年	田久 実季	9
福島県	白河市立東北中学校	二年	真尾 結羽	10
茨城県	土浦日本大学中等教育学校	一年	薄井 舞	11
埼玉県	浦和明の星女子中学校	三年	大間知 莉奈	12
神奈川県	聖園女学院中学校	一年	大塚 美穂	13
新潟県	上越市立柿崎中学校	三年	井川 遥喜	14
新潟県	上越市立柿崎中学校	三年	布施 新葉	15
山梨県	山梨大学教育人間科学部附属中学校	一年	小平 守莉	16
三重県	高田中学校	二年	隅田 五鈴	17
滋賀県	長浜市立西中学校	二年	是洞 光南	18
京都府	京都市立伏見中学校	三年	岡本 みい	19
京都府	龍谷大学付属平安中学校	二年	桜井 萌	20
京都府	立命館宇治中学校	一年	渡邊 優里菜	21

大阪府	大阪教育大学附属池田中学校	二年	今川 結帆	22
兵庫県	西宮市立大社中学校	三年	投石 萌	23
奈良県	天川村立洞川中学校	二年	小屋 香菜子	24
山口県	山口大学教育学部附属山口中学校	三年	岡村 智聖	25
徳島県	那賀町立木頭中学校	三年	谷 結羽	26
香川県	宇多津町立宇多津中学校	二年	大浦 理芳	27
長崎県	島原市立第二中学校	三年	雪野 明里	28
長崎県	長与町立長与中学校	三年	末永 詩乃	29
熊本県	熊本県立玉名高等学校附属中学校	二年	松本 海空	30
鹿児島県	学校法人津曲学園 鹿児島修学館中学校	三年	三好 紗理依	31
沖縄県	宮古島市立砂川中学校	一年	源河 千春	32
沖縄県	宮古島市立伊良部中学校	三年	上里 珠里	33
沖縄県	メルボルン日本人学校 中学部	一年	北村 祥子	34

資料

第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	ポスター	35
第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	概要	36
第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	地方審査優秀者名簿	37
第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	応募状況	38
第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	応募状況の推移	39
第三十五回「全日本中学生水の作文コンクール」	表彰式	40

目次

最優秀賞 国土交通大臣賞

命の源

岩手県 滝沢村立姥屋敷中学校二年 鈴木 綾

私が住んでいるのは滝沢村の姥屋敷地区という所です。酪農を営んでいる家も多く、私の家もその中の一つです。自然に囲まれていて、目の前にある雄大な岩手山がいつも私達を見守ってくれています。

私の家の水は井戸水です。自然の恵みを受け、透き通り、いつもおいしく飲んでいきます。水量が豊富で、水が枯れてしまうとかが、水が少なうて使えないという心配をそれまでしたことがありませんでした。

そんな私達を襲った、忘れもしない三月十一日の東日本大震災。停電が起こり、全てのライフラインが止まってしまいました。私の家は酪農をしており、牛も六十頭余りいます。私達人間にとっても水は大切ですが、動物にとっても同じで、我が家では、その六十頭の牛に飲ませる水の心配もしなければならなくなりました。牛は一日に約百リットルもの水を飲むと言われています。その水が全く出なくなってしまったのです。このような非常事態のために発電機を準備している家もありますが、私の家にはありませんでした。牛は水を飲まないとい牛乳が少ししか出てきません。また、私の家では搾乳した牛乳を近くの会社におろしているのですが、どうしても毎日、定期的に搾乳しなければなりません。事態は深刻でした。

停電直後、父がまず行った事は牛のえさの確保でした。この緊急事態で品切れも予想されたからです。父と私はすぐさま車に乗り、大渋滞の中をえさの会社に向いました。そしてなんとか確保することができました。

次に搾乳です。乳しぼりをしないと乳房に炎症が起きてしまいます。停電で搾乳機も止まってしまったので、父と祖父母は余震が続く真つ暗な牛舎の中で乳しぼりをしたそうです。一晩中バケツ（ミルクを一時的にためるタンク）を使い、乳しぼりをしたと言っていました。真つ暗な牛舎の中で六十頭分の搾乳をし、家に帰ってきた父はととても疲

れた顔をしていました。そんな父に、母はコップ一杯の水を差し出しました。その水を、一気にゴクゴクと飲みほした父は「生き返った。」と言いました。一杯の水の威力です。

翌日は泊まっていたいとこ達と一緒に、牛の水やりのために奮闘しました。人間の水は市販の水でまかなうことができませんでしたが、ただでさえ水不足が問題になっていた時です。六十頭もの牛にペットボトルの水を与えるのは無理です。幸い私の家には、牛用に井戸水から自然落下で流れてきた水を貯める所がありました。そこから手作業で牛舎に運ぶことにしました。五百リットルのタンクに水を入れると人の力では持ち上げきれない程の重さでした。大人達は軽トラックに積んでは牛舎に運ぶという作業を繰り返し、私達子どもは一杯ずつバケツに水をくんで運びました。三歳のいとこも小さいバケツで何回も運んでくれました。

牛舎にバケツで水を運んだ時の牛の表情が忘れられません。大きな瞳で私をじつと見つめる目が水を待ちわびているようでした。バケツからウォーターカップに水を入れると、むさぼるように飲みほしてしまいました。この作業を何度か繰り返すと、牛もとても満足そうな顔をしてくるのでした。服はびしょぬれになり、とても疲れる作業でしたが、うれしそうな顔をしている牛を見て、私も幸せな気持ちになりました。

普段は当たり前のように電気や水を使っています。しかし今回の震災で、人間にも動物にも「水」は本当に大切なものだと感じるようになりました。水がないと人間も動物も生きることができません。まさに「命の源」です。疲れきった父を潤してくれた一杯の水。たったコップ一杯でも人間は立ち上がって次に向うことができると知りました。これからは、水が使えるありがたさを心に留めて、限りある資源を大切に使いきたいです。

優秀賞 国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞

未来へつなぐ水―大切さを認識して―

茨城県 茨城町立明光中学校二年

加藤 太河

水は蛇口をひねったら出てくるのが当たり前だと思っていた。しかしそれは、二年前の三月十一日。東日本大震災によって根底からくつがえる。誰もが想定していなかった巨大地震によって、電気や水道、ガスが寸断されたのだ。度重なる余震に不安を覚えながら一夜を明かし、人々が求めたのは水だった。ぼくの家でもほとんどの食器が落ちて割れ、壁がはがれ落ち、家の中はめちゃくちゃだった。家の中を掃除しようにも水が出ない。吸いこんだ埃にうがいをしたくても水がない。がれきを拾って汚れた手も洗えない。寒さの厳しい中、温かいお風呂にどんなに入れたかったか。トイレを流す水さえも無駄には出来ず、なるべく水分をとらないようにしてトイレを控えた。たぶんぼくにとつて、水が大切な物だと考える機会は、あの時が初めてだったと思う。地震の次の日から各所に給水車がやってきたが一人二リットルと制限され、急なことで入れ物も少なく、本当につらい十日間をすごした。だからこそ、十日目の夕方、ほんの少しではあったけどゴボゴボと音を立てて蛇口から水が流れ出した時、近所の人と知らせ合い、「よかった、よかった」と喜んだことが心に刻まれている。津波や原発の被害に遭い、今も十分にライフラインが整っていない地域の人々には、ぼくらの被害は小さなものだし、大変だったなんて愚痴を言っただけとはいけないとわかっている。それでも、日頃の便利さに慣れてしまったぼくには、文明がとぎれてしまったような大きな出来事だった。

震災をきっかけにして、ぼくは水に対して新聞を読んだり、ニュースで見たり、母と意見を交わすことが多くなった。震災からしばらくして、トイレについて研究している人達が、水を使わずに臭いや汚物を閉じこめる開発をした記事を読んだ。彼らは、震災の時に各避難所でトイレを清潔に保つことが難しく、数の確保にも問題があったことから研究を進め、組み立て式の簡易トイレを開発したのだ。これらの開発は災害時だ

けでなく、富士山などの高い山で、汚物を処理するのにも役立つという。つい先日、富士山の世界文化遺産登録が内定したというニュースを見た。これによって、世界から今まで以上に登山客が訪れる。環境を守るためにトイレなど外すことのできない面をいかにクリアしていくかが課題となるだろう。ニュースを見ながら簡易トイレの記事を思い出した。今の日本はそれを補うだけの技術を持っている。

ぼくらの住む日本国は、世界の中でも比較的安定した降水量があり、水を衛生に家庭に届けるシステムが整っている。夏の暑い時期ごく稀に取水制限されることはあるが、人々が飲む水に困ることはない。だが、これから先人口が増加し地球温暖化が進めば、全世界が水不足の危機に突入するおそれもあるというシュミレーションをテレビで見た。一リットルの水を買うのに二千円を払うような時代がやってくるという。ぼくたちが何の気遣いもせず使っている水が、それほど貴重なものになるなんて今はまだ考えられない。だが、世界には水を得るために数時間かけて川まで水を汲みに行く国や、衛生とは決していえない水で食事を作っている国が多くあるという。蛇口をひねって出た水がそのまま飲める国はごくわずかなのだ。たまたまぼくは日本に生まれ、その恩恵に預かることができたが、それを当然と思っただけではないのだ。

水は、飲料、風呂、トイレと生活の中に欠かすことのできないものだ。だからこそ水を大切に使い、永久に使えるよう保持することが必要だ。これからの水のあり方について、日本という国がリードし、多様な技術で水源を保持していくことができれば良いかと考えている。そのための一歩がトイレ開発であったり、ぼくら一人一人の小さなエコ活動なのだろう。

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

この冬のささやかな節水活動

静岡県 湖西市立白須賀中学校三年 森田 千冬

この冬は、ことのほか寒かったです。そしてこの冬、私はささやかな節水に取り組みました。きっかけは、母のこの言葉でした。

「昔の人は、湯たんぼのお湯で顔を洗ったり、植木に水をやったりしたんだよ。」

築五十年をこえる冬の我が家は、どの部屋にいても寒いのですが、寝間は一層冷えこむので、毎年湯たんぼを使っています。夜、眠りに入る時、湯たんぼの心地よさは格別ですが、朝になると湯たんぼのことなどすっかり忘れてるのが例年のことです。しかし、この冬の朝は少し違いました。目覚めるとまず、ほのあたたかい湯たんぼを抱えて起き出し、洗面所に向かいます。洗面器に入れたぬるくなったお湯で顔を洗うと、ねぼけた気分が徐々にぬけていって、残った水を植木にかけたり、犬のタロの飲み水につき足したりしました。初めは、寒い冬の朝にひと手間加わることに抵抗もありましたが、十二月から三月の月上旬まで、自分でも意外なほど根気よく続き、よい習慣となりました。

私が、こうした節水意識をもつようになったのには、理由があります。それは、昨年の夏に、水についてのお話を聞く機会があったからです。その会場では、二リットルのペットボトルが二十個描かれた一枚の紙が渡されました。お話を聞きながら、その日の朝から現在までに自分が使った水の量をぬっていくのです。トイレ、洗顔、歯みがき、食事、洗たくなど、やってみて驚いたことに、私はその日の午前中の方だけで、ペットボトルの大半をぬりつぶしていました。無意識に、いとも簡単に、水を使い続けていることに、はっとしたのを覚えています。

また、その会場で目にした作文の中に「約十三億八千六百万立方キロメートル」という数字を見つけて、ドキッとしました。この数字は、地球上の水の総量で、太古の昔から今まで水の量はほとんど変わらないという内容でした。「地球にある水の量は限られている。」その数字は、初

めて私にその事実を具体的に示していました。それまでどこか他人事だった水に対する私の意識は、思い返せばあの時から少しずつ変わり始めたようです。蛇口からは、使う水の量しか出さない。シャワーは使わない。みそ汁など食べ残しはしない。わずかなことですが、私の日常の中に節水活動が根づき始め、気がつくとその冬の湯たんぼの実践につながったのだと思います。

そんな湯たんぼがふとんの中から消えた頃私は「汚染水」という言葉をニュースで耳にしました。福島第一原発の原子炉建屋地下に毎日流れこむ地下水のことです。一日に四百トン。放射能物質に汚染された水は、海にも流すことができず、敷地内のタンクに貯蔵するしかなく、そのタンクももうすぐいっぱいになってしまうと伝えていました。自然界から隔離された大量の水。これは、限られた水資源の消失を意味します。また、これらの汚染水が大量に海にもれ出した時、海洋生物に与えるダメージはもちろん、長期に渡ってさまざまな負の連鎖をひき起こすことでしよう。飲めない水、泳げない海、食べれない魚。水の汚染は生命の危機に直結する一大事なのです。私は、一日も早く汚染水が浄化できる技術の開発を願います。原子力というエネルギーを生み出した歴史をなかつたものにはできないのですから、前へ進むほかありません。

水は、なくてはならない大事なものだとも知っています。だからこそ「わずか」とか「ささやか」とか思いながらも、全ての人が水への意識を確かなものながら、生活することが必要だと強く感じます。便利とか快適とかの生活の陰で失われた「もつたいたい」や「ありがたい」といった昔の人々の水への意識こそが、現代には大切なのだと、この冬の経験を通して私は思うようになりました。

優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

「水の大切さ」

「あの家のおじいちゃん最近見かけんけど大丈夫かなあ。」という父の問いに、

「大丈夫。心配ないよ。」という祖母の答え。

どうして、そんなことがわかるのか不思議がっていた私に、台所から「おばあちゃんはメーターでわかるのよ。」という母の声が届いた。

祖母は、水道の検針員をしている。先日インターネットで「宮城県栗原市で料金検針時などに一人暮らしのお年寄りに声をかける事業を開始した」というニュースを見た。もちろん祖母も仕事だから、家をのぞきこんだり、プライバシーに立ち入ったりはしない。しかし、祖母は「各家庭で普通どれくらい水道を使用しているか」を把握しているので、自然とその家の状況がわかるらしい。極端に水道の使用量が変化するとその家の人に連絡することになっている。水漏れなどはすぐ分かるし、今まで何度も水道課に連絡し修理してもらったこともあったらしい。

祖母はよく「もったいない」といった言葉を使う。もちろん、母や私も使うが、祖母は私たちと少し違う。「水」に対しても「もったいない」と使うのである。私は、うっかりしたところがあつて、お風呂のお湯を入れる時にあふれさせてしまうことがある。その度に祖母は「もったいない」という。「水なんかいくらでも出るのに」と思った私の顔を見て、祖母は少し話をしてくれた。

川から少し離れた私の家周辺では、井戸水はとても貴重だったこと。つるべを使って井戸水をくみ、スイカを冷やしたり、畑で作った作物などいろいろなもの洗い、炊事に使っていたこと。洗濯などは、近くの小学校に行き、ポンプを使って水をくみ洗わせてもらったことなど、祖母は水についての思い出を次から次へと語ってくれた。祖母にとって「井戸」や「水道」は毎日の生活の中でいつも一緒に過ごした「仲間」のよなものではないだろうか。ふと、そんな感じがした。

徳島県 阿南市立那賀川中学校一年 川田 実央

私の家でも学校でも、蛇口をひねれば水は出る。当たり前のことすぎて、今まで考えたこともなかった。しかし、祖母は「つるべの重さ」も「ポンプの軽さとありがたさ」も知っている。なんだか、私たちより「水のありがたさ」を知っていて、水を大切に作る気持ちが強いように思えた。

この間の国語の時間、調べ物学習をしていて気がついたことがある。私の名前は「実央（みお）」と読むが、「みお」は「滯」であり、「水脈」とも書く。祖母から井戸の話聞いた後だったので、なんだか私の知らないところで、私自身も水と関係があつたみたいだに思つて、少しだけ誇らしい気分になった。家に帰って、母に話すと、にっこり笑つて、しばらく黙っていた後、週末「那賀川に行こう」と誘われた。

久しぶりに行つた河川敷は美しく整備されていた。私の町を流れる「一級河川那賀川」は徳島県内に水源を持つ中では県内最長の河川である。私はこの川を見るのが好きだ。

遠い山から流れてきた水たちは、水田をうるおし、工業や農業用水として利用され、地下水となり私たちの生活を支えている。そして、私たちの町、那賀川町で海へとそそぐ。「水たちの長旅のゴールを見ているようだね。」と話しかけると、隣に腰掛けた母は「海に出た水は、蒸発し、雨となり、また、川の最初の一滴になる」こと、「その水を汚すことは、水につながる全てのものを汚すことになる」ことなどを話してくれた。その時、『自分の名前につながる「水」を私は絶対汚さない』と自分の中で強く決意した。

私はまだ、中学生。できることには限りがあるかもしれない。しかし、まず自分から行動し、私の周囲から「水を大切にする」活動の波を起こしていきたい。そして、今度は祖母と、胸を張つて「水」の話をしてみたい。

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

ふるさと心の心で守る命の水

奈良県 天川村立洞川中学校二年 更谷 昂

僕が住む奈良県天川村は、環境省選定名水百選「洞川湧水群」のある名水の里だ。ここに住む僕達は、昔から水を大切に守りながら暮らしている。しかしながら、近年はゴミの放棄やポイ捨てが多く見られ、今年の四月には、村民が一丸となった「村民ボランティア清掃」が行われた。村民皆で協力して収集したゴミの量は、一般家庭ゴミ、観光ゴミ、鉄くず等、二トトラック五台分であった。この様に、天川村では、水を育む環境を守る取り組みとして、清掃活動や名水まつりなど様々な行事が行われている。

そこで僕は、天川村以外の地域で、水を大切に取る取り組みが行われている場所のを知りたくなり、近畿の水がめと呼ばれている琵琶湖に注目した。琵琶湖は、近畿圏のおよそ千四百万人に生活用水を供給し、多くの生き物が生息するところである。僕は、インターネットで、平成の水百選に選定された、滋賀県高島市にある、「生水（しょうず）の里針江」の事を知り、早速家族と共にそこへ出かけた。針江地区は、「生水（しょうず）」という豊富な湧水を使い、「川端（かばた）」という生活用水システムを六百年以上受け継ぎ、守り続けているところだ。生水（しょうず）とは生きた水という、素敵な表現だ。川端とは、比良山系からの地下水脈に管を通し自噴させ、その水を壺池という壺に溜め、壺池からあふれ出た水は、少し低い位置にある端池という池に流すシステムである。壺池は、飲料や野菜を冷やす為に利用、端池は野菜などを洗う為に利用される。端池には、洗った野菜くずや米粒などをエサとして食べるコイなどの魚が飼われており、水を清掃する役割を果たし、昔は成長したら食べていたそうだ。

端池は、水路、河川へとつながり、琵琶湖から昇ってきた魚などが自由に出入りしている。僕は、宿泊施設で、川端という素晴らしい循環システムを体験し、人と人、自然と人とのつながりを強く感じる事ができた。

翌日は、地元ガイドによるエコツアーに参加した。午前は「高島市うおじまプロジェクト」他のいくつかを見学した。このプロジェクトは、失われた琵琶湖の環境を取り戻す事により、魚たちが産卵、生育しやすい環境づくりに取り組んでいる。午後は、針江の各家庭にある、様々な川端などを見学した。針江の方々は、川端や生き物の生息環境を守る為、年三回の川掃除、年一回の水路掃除、十二月のヨシ刈り、二月のヨシ焼き等を行っている。川や水路を琵琶湖から昇ってくる魚などの生き物の産卵、生育場所とする為には、定期的な河川の藻などの草刈りが必要だそうだ。エコツアーを通して僕は、琵琶湖の環境を守る為に、地域、官公署、研究機関、企業等が連携、協力している姿に感動した。

水は僕達の生命を育むと共に、多くの生き物を支えてくれるとても大切なもの。天川村と針江は、共に、そこに暮らす地域の人々の絶え間ない努力によって、安全でおいしい、多くの生き物が暮らしている水が守られている。針江での体験を通して僕は、水は地球規模で循環しているイメージを、より一層実感することができた。だからこそ僕は、限られた資源である水に感謝し、水の節水に努め、河川のゴミ拾いなど、友達にも呼びかけ自然を守る活動をしていきたい。日常の中で行う、小さな活動でも、その活動の輪が広がっていけば、一滴の雨が大河となるように大きな成果となると思う。僕にとって美しい水を育む天川村の自然環境は、誇りであり宝物だ。僕はもともと様々な地域の水の歴史や文化に関心を持ち、先人の暮らしの知恵に触れてみたいと思うようになった。

「天川村や、針江の命の水は、ふるさと心の心で守られている。」

優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞

「もったいないを無くしたい日本。もったいないを作らないベルギー。」

ベルギー王国 ブラッセル日本人学校中学部三年 園田 かのん

最近の私の楽しみは二日に一度、バススタブにお湯をため、日本に住んでいたときと同じようにお風呂に入ることだ。お湯に身体が浸かると疲れが取れるし、心をリフレッシュすることができる。しみじみ自分が日本人だなあと感じる瞬間でもある。

私がベルギーに来たのは約三年前。初めて見る外国での我が家は不思議なことだらけだった。まずシャワールームという別室があること。バススタブは別にあるが、あまり使用されていないのか、シャワーカーテンすらついていない。父に「ベルギーの人はお湯に浸からずにシャワーしか浴びないの。」と聞くとベルギー人はお風呂に毎日入らないこと。シャワーも週に二回くらい、洗面台の前でタオルで体を拭くだけらしいよと話してくれた。日本よりずっと乾燥をしている国だからかなあ。と父は付け加えたが、私にはとてもショッキングな話だった。なぜなら日本では毎日お湯に浸かりゆつくりするのが当たり前だったからだ。これが風習の違いなんだなあと思った。

しかしそれからの日々の生活のなかで、母がベルギー人の情報を聞いては私に教えてくれた。それはベルギー人の節水意識がとても高いということだった。ある家庭では、おじいさんがバススタブにお湯をためて使用するときは、朝から家族にそのことを必ず伝えておいて、まるでイベントのような扱いになるそう。彼は洗髪も五日に一度程度。友人・知人宅を訪ねてもできるだけトイレを使わないことを礼儀としているらしい。また一般家庭にはシンクがふたつに仕切られていて片方はため洗い用、もう片方はためすぎ用となっていて、決して流しながらすすいだりはしない。たいがいの人が洗濯も週に一度か二度、服も毎日着替えたりはしない。庭のある家にはたいがい雨水貯水槽があつて、植物の水や

りやトイレ、洗濯にもつかわれているそう。この話を聞いて、どんなところでも香水が香るのは、匂い消しの方法でもある事。大きなショッピングセンターにもトイレが一、二箇所しかないのも納得ができた。

日本にいたころ母はシャワーの先を節水タイプのものに変えていた。そんな母の口ぐせは『もったいない。』だ。私たち兄妹は耳にタコができる程その言葉は毎日耳にしていた。しかしベルギーには『もったいない。』という言葉が存在しないのだ。根本的に無駄な事をつくらないから言葉も必要ないのだろう。昔の私はうるさいなああと聞き流してばかりだったが、最近の私はベルギー人を見習い節水意識をもって、毎日洋服を洗濯に出さない。お風呂は二日に一度とする。シャワーで身体を洗うときは必ずお湯を止める。このようなことをして少しずつでも自分なりに努力している。

今、日本は世界でも有数の水の国である。お風呂も飲料水も、どこでも蛇口をひねれば美味しく飲める安全な水がでることは世界に自慢ができることだ。『世界には現在約八億八千四百万人の人が安全な飲料水を利用できずに暮らしており、約二十六億人が下水道などの基本的な衛生施設を利用できない。』衛生施設がないということがどれだけの尊い命をうばっているのかと考えると、とても悲しい現実だ。そんな世界の状況を見聞きすると、いかに自分が恵まれていたのかと感謝の気持ちが出てくる。その約二十六億の人が安全な水を飲める環境になるよう世界中の人たちが努力しなければならぬと考える。私は、ベルギーで住んでいた日々でベルギー人から学んだこと、『もったいない。』という言葉を使わない暮らしを日本に帰国したら実践したい。

入選

人と水の二人三脚

福島県 二本松市立岩代中学校二年 安齋 茉由

「水をくんできてくれないかい？」

肺炎のために入院中の祖母がコップを持ち、少しほほえみながら私にそう言った。病室は空気が乾燥しているから、のどが渴いたらしい。私は「うん」と返事をし、足早に病室を出て、水道がある給湯室へと向かった。その途中、いろいろな病室を少しのぞきながら歩いた。どの病室にも、しわしわになっていたり、がりがりにやせ細っているお年寄りがいた。その姿に少しぼーっとしながら歩くうちに、すぐに給湯室に着いた。

蛇口に手をあて、キュツと軽くひねる。冷たく澄んだ水が、コップを満たしていく。その時だ。ふと思った。「人の体は水道に似ている？」と。なぜ急にそんなことが思い浮かんだのだろう。きっと、祖母や入院中のお年寄りの方々が、私に気付かせてくれたのだと思う。

人の体には、血管が通っている。手も足も頭も、体中すべてにはりめぐらされていて、その血管がないと人間は生きていけない。一方、水道管も、私が今踏んでいるコンクリートの下、それよりもずっと深い所に、まるで血管のようにはりめぐらされているはずだ。水がなければ私たちが生きていけないという点をとつても、人間の体の仕組みと水道の仕組みは似ている。それに、水道管は時がたてば古くなりさびつき、水を運ぶことができなくなるといふ点と、子どもの頃は正常に機能していた血管が、年をとるにつれてつまったり弱ったりするという点も似ていると思う。

しかし、よく考えると違ふところもある。水道管は古くなれば交換することができるが、人の血管はそう簡単に交換することはできない。当然のことだ。でも、水道管のように、弱ったり傷ついたりした血管も交換することができるのなら、どれだけの人たちが楽しい日々を過ごせることだろう。

祖母にたのまれた水くみをしながら、改めて人と水の関わりについて考えさせられた。よく考えると、水はただのどが渴いたから飲むというだけではない。よく、「人の体の六十パーセントから七十パーセントは水が占めている」と聞く。その水分が体からなくなればどうなるだろう。水分は肌が乾燥したり、のどが渴いたりするのを防ぐだけでなく、栄養素の消化・吸収・体内への運搬、老廃物の排泄などに欠かせず、体細胞や体組織の役に立っているそうさ。つまり、まさしく「命の水」で、水がなければ人は生きられないのである。

また、入院中の祖母のまわりを思い浮かべると多くの水があふれていることに気がついた。天井からぶら下がっている点滴。母に、「どんな物質が入っているの？」

と聞いたところ、中身は水のような液体と塩のようなものが入っており、脱水症状の改善に役立つものだそうさ。祖母は肺炎のために普通に呼吸をするのが難しく、酸素マスクをしている。その酸素マスクの、酸素を発生させているビンの中には水分が入っており、ぶくぶくと音が鳴っていた。病院で治療をする上でも、水は欠かせないものさうである。水がないと健康を害するし、水がないと治療ができない。

今思えば、人がごく普通に生活していく上で水というのはいろんな形に変化しながら常に私達のまわりにある。なにか物を作るにも、料理をするにも、運動をするにも水が必要なのである。私たちの生活は水が支えている。水のおかげで豊かな生活が成り立ち、水があるから幸せな生活を送ることができるのではないだろうか。

「ジャー」・・・コップに水をくんだあと、私は勢いよく出続けている水を手でさわってみた。四月とはいっても水はまだ冷たく、でもどこか心地よかった。

入選

他人事ではありません!!

福島県 いわき市立小川中学校三年 田久 実季

蛇口をひねれば綺麗な水が出てくる生活が当たり前だと思っていま
せんか？

私はいわき市の山間部に住んでいます。上下水道はありません。小学
校二年生の時に井戸が出来るまでは、人が入らない山奥の沢からパイプ
で何kmも水を引いていました。雨が降ると濁ったり、台風の際は砂でパ
イプが詰まって、泥水さえ出なくなったりしたので、雨が降りそうにな
ると家中に水をためて備えていました。雨がずっと水が足りなくなつて、
近くの親戚に水をもらったり、お風呂を借りたりして生活していました。
なので、井戸ができた時は、小砂が入っていない透明な水をそのまま飲
めることがとても嬉しかったのです。

家のすぐそばには川があり、カジカガエル・サワガニ・イワナ・ホタ
ルなどが生息しています。私の家の田んぼには、ドジョウ・タガメ・サ
ワガニがいます。小さい頃から見ていたので、当たり前だと思っていま
した。それらの生物たちは水が綺麗でなければ生きられないと知ったの
は、少し前のことです。でも、その生物たちは年々、数が減っています。
人間が便利な生活をする事によって、環境によくないものが生み出さ
れ、それがきちんとした処理をされないと、弱い者から影響を受けてい
きます。生物たちは、元々そこに住んでいたのに、そこに生息しづら
くなるような何かが、もうすでに身近で起こっているのです。小さな生物
たちは、いつか人間にも悪影響が出るとい警告をしているのだと思
います。

私の家のそばの川は、町の人たちの水源になったり、田んぼの水とし
て使われたりしています。自分の家でもお米を作っていることから、水
の大切にするこや水を汚さないことについて、私はとても気をつけて
います。下水道がないので、浄化槽で汚水処理していますが、汚れた
食器や鍋は新聞紙でふきとってから、少量の洗剤で洗ったり、米のとき

汁は植木の水やりに使ったりしています。

でも、水だけを綺麗にしようとすればそれで良いものではありません。
結局、土壌や大気、川や海はすべてつながっているのです。例えば、大
気が汚れば、雨となって汚染物質が土壌を汚し、それが海や川に流れ
込むのです。どれか一つでも汚れてはいけません。昔、日本でも
工場排水による公害が問題になりました。最近では、中国のPM2.
5の問題が大きく取り上げられました。中国では安心して水が飲めない
とも報じられました。日本でも浄水器をつけていたり、ペットボトルの
水を買ったりと、水道の水を飲むことすらしない人が増えてきていま
す。それは、私の父母の子供の頃や、祖父母の時代には考えられなかつたこ
とだと思えます。上下水道が整っていて、水の苦勞も知らない人たちは、
あまり意識することなく汚れを流しているかもしれません。飲む水はか
り気にしていても、汚水を出していれば、巡り巡ってその水を飲むこと
になるということをお分かつているのでしょうか？

人間は、自分たちで環境を汚しても、浄水したり、自分たちが住める
場所へと移動したりと、いろいろな策を講じることが出来ます。でも、
虫や生き物・植物は、そんなことはできません。自分さえ良ければいい
のでしょうか？動植物のいないような世界で、人間だけが生き残れば
いいのでしょうか？今の自分には直接害がなくとも、そのツケは必ず巡
ってきます。子孫や、地球の未来のためにも、一人一人が意識を持って、
皆で力を合わせれば大きな力になるといことを信じて、水を守る取り
組みを続けていくことが大事です。

私は、動植物がたくさんいる自然豊かな地球が大好きです。みなさん
はどうですか？

入選

「水の本当の姿を守る」

福島県 白河市立東北中学校二年 真尾 結羽

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分。震度六強の地震が来ました。沿岸地域は大きな津波にのみこまれ、あつという間に何もなくなってしまう、海は流れてきたがれきでいっぱいでした。私はその様子をテレビで見て水は人間、動物、植物にとって大切な存在だけれど、時には町をのみこんだりする姿に変身する恐ろしいものだと想像するだけで怖くなりました。

水というのは生き物にとって、必要不可欠な存在です。人間の体の約六十パーセントは水で出来ているといえます。その水がこの世からなくなったら、人間は生きていけません。植物は水と二酸化炭素を材料に生きるため、呼吸するために必要な酸素をつくります。水は生き物にとって親のような存在です。

しかし、東日本大震災の時の津波のように時には人の命をうばう姿にかわってしまうこともあります。この地震の死者と行方不明者を足すと、約一万六千人ぐらいになります。水は津波に変身し、たくさん人の命をうばう殺人者になってしまいました。

水には生き物になくはならない親になる姿、時に生き物の命をうばってしまう殺人者の姿の二つの姿があります。しかし、私は生き物を助け、生きる源となる姿が本当の姿だと思えます。そんな水を、私達人間は一生守っていく必要があります。

しかし、最近この大切な水が汚れてきています。幼稚園児のころ私はよく橋の上から川で泳いでいる魚を見るのが好きでした。友達と下までおりて川の中で遊んだりもしました。そのころの川の水は、不安をまったくかかえなくても入れる、きらきらしたとてもきれいな水でした。それから六年ぐらいいしかなかったのに、今では魚が泳げるような水ではなくなり、自分も入りたいと思えるようなきれいな水ではなくなってしまう。川にはたくさんゴミが捨てられています。

私は小学生の時、総合の学習で身近な川の水質調査をしました。その結果が「汚ない」だったので、すごく驚いたとともに自分の近くにある川が汚なかつたことがショックでした。

川の水がここまで汚なくなってしまったのは、ゴミがたくさん捨てられるようになったからだと思います。飲みかけのペットボトルや、カン、ビン、ビニール袋などさまざまな種類のゴミが捨てられるようになりました。川沿いだけではなく、道路や歩道にも捨てられていて、どうして平気で捨てるのだろう、捨てたらどうなってしまうのか考えないのだろうかと思いました。

きれいだった水を汚なくしているのは、私達と同じ人間です。そんな人達が汚なくした水をもとに戻すのは、同じ人間の私達でなくてはいいないと思います。水はゴミや流れこむさまざまなもので汚なくなっています。それならそのゴミや流れこむものの量を少なくすれば水はきれいだったころの姿に戻ると思えます。捨ててあるゴミを拾う、皿洗いの時洗剤の量を減らす、食べ残しをしないなど、簡単に出来るような小さなことから少しずつでもやっていけば、水をきれいにする手助けになります。

水の本当の姿は私達人間や動物、植物を守り育ててくれる親のようなものです。そんな水を今度は私達が守り助けなければいけません。小さなことから一つずつ気をつければ、少しずつ、少しずつ、水はきれいな姿をとり戻します。水の本当の姿を知り、守っていくのは私達だけだと思います。今度は私達が水に親孝行する番です。

入選

川の側で暮らす祖父母

茨城県 土浦日本大学中等教育学校一年 薄井 舞

祖父母は川まで二百メートル程の所に暮らしている。スーパーも遠く病院も離れているので、私の家に泊まりに来ると

「便利でいいね」と言う。

私の家は、上下水道料金を払って生活水を使っているが、祖父母の家は、集落で当番を決め、定期的に塩素を入れ、井戸を管理して使っている。だから、我が家の水道料金を言うと驚く。そんな祖父母も井戸水を全てに使っている訳ではなく、飲み水や料理には、スーパーで買った水を使っている。祖父母の家の台所、お風呂場、洗面所、トイレの蛇口には祖母手作りの小さな袋がついている。それは、大雨が降ると砂が混じり、黄色くにごった水が出て、洗濯物が黄ばんだり、砂がたまって洗濯機が壊れてしまう程だからだ。

川はほとんどは穏やかで流れも緩やかだが季節のたいがいには雷雨になる。近所の神社に雷の神様を奉っているからなのかもしれない。

春にはザリガニや石ガメ、フナやコイやナマズも多く、水草も川の中で日向ぼっこしているように見える。

夏になるとたつぷりと川の水を吸った稲がたくましく伸び、川の中の水草も堂々とした姿で流れに負けない姿が映える。ひとたび天候が悪くなると決まって雷が鳴り、川に落ちる音は（シヤン）という鈴の様な音でとても怖い。そして何時間も電気を消さなくてはいけなくなる。

秋は豊作に感謝する祭りがあがるが、台風季節で大雨が続くと洪水になり、消防団の人達が土のうを積んで夜通し見守ってくれ、危険になると祖父母は避難の為に私の家に泊まりに来る。その度に祖父母は不安そうに言う。

「この季節が来ると眠れなくなる。舞の家に来ると静かで安心してぐっすり眠れるよ。」

私は、祖父母から小貝川の決壊した話を聞いた。何日も雨が続き高い堤防が崩れ、町に流れ込み沢山の家が水に浸かってしまった事。その水は、排泄物や上流からの漂流物、動物の死骸や泥が混ざり、水が引くと赤痢予防の為に石灰（白い粉）をまいたと。たまたま祖父母の家側の堤防は崩れず被害に遭わなかったが、二階にいて同じ目線に水がある事の怖さ、暗闇で聞く低い川の流れる音の怖さ、洪水への不安は二十年以上経った今でも甦るらしい。私はそんな祖父母にこう言った。

「一緒に暮らそうよ。水の心配なくなるよ。」

すると祖父母はやさしい口調で「ありがとう。でも川の近くのお墓やこの土地は、ご先祖様の残してくれたものだから守らないと。」

そう言った。収穫の季節、親戚のおじさんの作ってくれるお米が届く。小貝川と鬼怒川の間に挟まれた土地で、たつぷりと水を吸って育ったお米は、本当に甘くて美味しい。

冬は川の側なので体の芯から冷える。それでも、祖父母の生活はこの先も変わらないだろう。蛇口についた丸々と砂の溜まった袋も、いつも目にする光景だ。祖父母の家に向かい、川が見えてくると心がホッとする。最近、健康ブームもあり、堤防をサイクリングする人やウォーキングする人達をよく目にする。魚釣りの人達も相変わらず多い。でも何よりも私が感動した事は、天気の良い日でも川を河川事務所のパトロールカーが巡回してくれている事だ。

「本当にありがとう。」

私の自慢の田舎。この土地に住む事は、時には不便な事もある。でも、皆が毎日食に困らず暮らせるのは生命の源、水のおかげなのだ。私は先祖の残してくれた川の近くの祖父母の家もお墓も、父や母と共に守っていくと思う。

入選

人を繋ぐ水

埼玉県 浦和明の星女子中学校三年 大間知 莉奈

ヴァーチヤルウォーター、仮想水といった言葉を耳にしたことがあるだろうか。仮想水とは、農産物・畜産物の生産に要した水の量のことである。日本の食料自給率は先進国の中でも低く、約四〇%となっている。日本は多くの食料を海外からの輸入に頼っているのだ。

これは、日本は間接的に海外の水を大量消費しているということである。詳細を調べてみると、日本の水の使用量と仮想水の量はほぼ同じであった。

世界は今、深刻な水不足に陥っているという。現在、世界では七億人の人が水不足という状況の中で生活を強いられ、一日約五千人、年間約一八〇万人の子供が亡くなっているそうだ。また、国際河川の流れる国では、上流での水の消費量が多いため、下流では水が枯渇し、国際紛争にまで発展しているらしい。私達にとっては信じ難い事実だが、人間に限らず命ある者にとって、水が得られるか否かは死活問題とも言えるので、紛争が起こるのも無理ないのかもしれない。このような紛争は今後も人口の増加に伴い、増えていくことが懸念される。

蛇口をひねれば容易に安全な水が手に入り、水不足とは一見無縁の環境に住む私達は、何か勘違いしていないだろうか。安全な水が簡単に手に入るの当たり前なことだと。世界の水不足なんて自分には全く関係ないことだと。私自身は、このような事実を知って、どれだけ自分が恵まれた環境に生きているのかを理解するとともに、水に大変恵まれた国に住んでいながら、世界の水不足問題に危機感を覚えた。

なぜなら、私達は先ほどの仮想水といった形で世界の水不足問題に関与しているからだ。私達の生活の為に他国の生活を破壊してはいけない。水不足による紛争で人間関係を引き裂いてはいけないと思うのだ。

そこで私達にできることは何か、考えてみた。まずは、自分がどんなに素晴らしい環境の中で生きているかという事実を知ることだ。また世

界の水不足問題についても、「自分には関係ない」という消極的な先入観を持つのではなく、「自分のどのような行動が世界の水不足問題の貢献に繋がるのだろうか」と、意欲的な姿勢を向けることが大切だと思う。具体的な行動例としては、入浴や洗顔中の水の無駄遣いに注意したり、風呂の残り湯を洗濯に利用したりと、節水を徹底することだ。直接的に世界の水不足の解決に寄与するわけではないが、水の大切さに対する理解が深まる。

また現在では水が豊富な日本も今後、水不足になる可能性が皆無であるとも言えない。そのような時の為にも、小さな努力をより多くの人々が積み重ねて行くべきだ。

そして最も重要なのは、仮想水を減らすために、国産品の商品を買うことである。国産品は輸入品に比べ、値段が高いというデメリットもあるが、仮想水の減少に加え、食料自給率の向上も期待できるので、地産地消は是非心掛けていきたい。

水は、私達が生きていく上で、必要不可欠な資源であるだけに、時には紛争の原因となり、人々を引き裂いてしまうこともある。しかし、水不足の解決に貢献しようと努力することで、私達は水不足に苦しむ知らない誰かの役に立つことが出来るのだ。こんなに素晴らしいことが他にあるだろうか。だから私は思う。水がこの地球に存在する限り、きっと水は私達人類の心を繋いでくれる、と。

入選

水と引き換えにしたもの

神奈川県 聖園女学院中学校一年 大塚 美穂

宮ヶ瀬ダムに遊びに行った話を祖母にした時、祖母は

「ふるさとっていいなあ」としみじみ言いました。私の祖母のふるさととは宮ヶ瀬ダムの底にあります。

私の知っている宮ヶ瀬ダムはクリスマスイルミネーションがキラキラと光る景色や山から見下ろすきれいな湖です。しかし祖母は今でも昔、山や川や庭で遊んだことが夢に出てくると言いました。そして今でも湖の底が見えると言っています。

「生まれた所に行けないと思うとなおふるさとへ帰りたい。」と祖母が言いました。私の母も祖母の実家の目の前の川でつりをしたり泳いだりしたことをなつかしそうに話しました。また祖母の実家に行く途中、山の上の方に赤と白の看板があり

「あそこまで水が貯まるんだよ。」と言われたことを話してくれました。宮ヶ瀬は昔およそ千二百人の人が住んでいて約二百戸の家があったそうです。当時、住民はダムをつくることに反対したそうです。しかしほとんど話し合いが進められてダムがつくられることになったそうです。

なぜダムをつくるのかというと、横浜市や川崎市の人の上水道の確保と川の下流の環境を守るためにダムで水を調節しなければならぬからです。

宮ヶ瀬に住んでいた人は、自分たちのふるさとを守りたいという思いでダムの建設に反対したのだと思います。しかし住民たちの願いはかなわず、ダムの建設を認めたことから、横浜市や川崎市の人の水が確保され、また、たくさんのお雨が降っても下流での洪水を防ぐことができるようになったそうです。

この話を聞いて、私はダムが必要なことは分かりました。しかし、なぜ何かを得るために誰かががまんをしなくてはいけぬのかと思いが苦しくなりました。

こんなことも知らずに、私は貴重な水を毎日たくさん使っていることに気づきました。母に注意されても、もったいないとも思わず出しっぱなしにしていたシャワーの水。手洗いや歯みがきが終わるまで出しっぱなしにして注意されていたことを思い出し「はあっ」としました。私にとって水は蛇口をひねるとあたり前に出てくるもので、なくなること考えたことはありませんでした。今、思うとニュースで水不足のため水道の水が使えず給水車で水を配っているのを見たことがあります。しかし、私は生まれてから今までそんな経験をしたこともなく、水が蛇口から出ないことを考えたこともありませんでした。もしかしたら、このあたり前のうらには、過去につらい思いをした宮ヶ瀬の人々がいたからこそある水だと思いました。

私にとってあたり前にある水。もしなくなってしまうたらと考えると、そしてその水と引き換えに、祖母を含め宮ヶ瀬の人々のふるさとがなくなってしまうことを思うと、私は自分の水の使い方が今までどんなにかげんだったのかいろいろ考えさせられました。

入選

きれいな水を守るために

新潟県 上越市立柿崎中学校三年 井川 遥喜

「山はあおき故郷 水は清き故郷」

この歌を口ずさむたびに、幼い頃祖父とよく訪れた大出口を私は思い出します。冷たく澄んだ水、湧き水のせせらぎ、水面に映る葉っぱの緑。そんな風景に吸い込まれそうな感覚を…

「おじいちゃん、このお水おいしいね。」

「そうだね。きれいなお水はおいしいね。」

「見て、おじいちゃん。イトトンボが飛んでいるよ。」

「本当だね。あのトンボも、水がきれいな所でなきゃ、生きることができななんだね。生き物も人間も、生きていくためにはきれいな水が必要なんだよ。それにこの水は、田畑を潤しておいしい作物を作るんだ。水は本当に大切だね。水の恵みには感謝しないとね。」

祖父との会話を、私は今でもはつきりと覚えています。

私の部屋からは、田んぼが見渡せます。五月になると、田植えをするために、田んぼには満々と水が張られます。澄んだ水は水鏡となって、青空、太陽、流れる雲、夜の月までも映し出します。この風景に水の美しさを感じ、おのずと水の恵みに感謝する気持ちになるのです。

しかし、美しい水とは対照的に、汚れてしまった水を目にするのも事実です。登校の道すがら、川に目をやると、茶色に濁った水、所々浮かんだ油、流れをせき止めるようにしているプラスチックごみ。

「上流では、あんなにきれいな水だったのに。」

言葉に詰まり、心は悲しさでいっぱいになります。この川の水が海に流れ込んだ後は…、確実に環境破壊へと繋がっている。

私は以前、テレビで「ゴミベルト」という存在を知りました。ゴミベルトとは、アメリカ大陸、アラスカ、日本、赤道を循環するように主要な海流が走り、その真ん中にごみが集まってしまう場所です。太平洋だけではなく、同様の海域は大西洋にもあると聞きました。

今日流れたゴミは国境のない海を漂流し、長い何月をかけてゴミベルトとなり、その多くはハワイへと流れ着くと言います。漂流しているごみの八十パーセントは陸上からの物と知り、愕然となりました。漂流しているごみをエサと間違えて食べてしまう鳥、イルカやウミガメ。そして、死んでしまった生き物の胃袋からはプラスチックごみが出てくるという現実。

また、他国の海岸へと流れついたごみは、その国が処理しなければならぬという話も聞きました。

私達は水を汚し、生き物を死に追いやり、他国の海岸までも汚して迷惑をかけているのです。想像を絶するほどの廃棄物。それが海に流れ出て汚染を起し、環境を破壊していることを私たちは自覚しなければなりません。

私は、祖父の言葉を思い出しました。

「生き物も人間も、生きていくためにはきれいな水が必要なんだね。水の恵みに感謝しないとね。」

私は環境に関するボランティアがあれば、積極的に参加しようと決めて実行しています。海岸清掃もその一つ。清掃に参加して感じるのは、想像以上にたくさんのごみが流れ着いているということ。その多くは、プラスチックです。たちまちいっぱいになるごみ袋。その重みは、今まで安易にごみを捨ててきた私達に対する警鐘のようにも感じられます。

清掃を終えて振り返ると、美しい海岸と砂浜に私の足跡…。これが自然の本来の姿。そう思いながら、水平線を眺めます。心は軽く、とても穏やかな気持ちです。

私はこれからも、海岸清掃に参加していくつもりです。これがきれいな水や生き物、世界の環境を守ることに繋がっていくと信じて。

入選

「うんめえ水」

新潟県 上越市立柿崎中学校三年 布施 新葉

「こっちの水、うんめえだろう。」

私の家の台所には、蛇口が二つあります。お湯や冷水が出る蛇口と冷水しか出ない蛇口。私が引越してきてから、いつも祖父が私に言う言葉です。祖父がよく使う方の水は夏はすごく冷たく、冬は少しあたたかいから、真似して私もよく使うようになりました。水筒の中には、必ずあの水を入れて部活動に向かいます。のどが渴いたら、水を飲みます。疲れも吹き飛ばすようです。そんな時、ふと「あの水は、何だろう？」と思うようになりました。

ある日、私と祖父で他愛ない会話をしていた時に、私は祖父に「あの水」について尋ねてみることにしました。

「おじいちゃん、あのおいしい水は何なの？」

すると、祖父は「あの水」について教えてくれたのです。元々、柿崎は地下水が低い位置にあるため深く井戸を掘らないと水は出ませんでした。だから、共同で井戸を掘って（共同井戸）利用していました。しかし、この共同井戸には問題が三つありました。

一つの問題点は、井戸から家に水を運ぶのがとても大変だということです。これは、後に共同の簡易水道が引かれ、簡単に井戸水が飲めるようになりました。

二つ目は、衛生上の問題です。掘っただけの井戸水はいろいろな細菌が心配されます。しかし、上水道が使われるようになってからは消毒された水が一般的になりました。

三つ目は、年々水を使う量が増えているので、井戸水が少なくなってきたことです。そこで、市や町、公共団体が、家庭に上水道を設けるようになりました。

上水道を通ったおかげで、どの家庭にも簡単に水を供給できるようになりました。当然、祖父母も上水道を使うようになりました。しかし、

祖父は幼い頃からずっと使ってきた井戸水を使いたい、飲みたいという思いが強くなってきたのです。祖父は言いました。

「消毒されている水より、昔からずっと使っているうんめえ水が飲みたかったんだ。」

私は不思議に思いました。

「バイ菌は心配ないの？」

しかし、

「毎年、検査してくださる人が来てくれるから、大丈夫だよ。」

という祖父の言葉にとっても安心しました。

祖父は、井戸水を再び使えるようになった時、とても嬉しかったと話してくれました。そして、幼い頃の思い出も話してくれました。

「おじいちゃんが子供の頃は、水が汚くて水を濾していたよ。今は何でも機械に頼るようになってね…。大変な作業をしてから飲む水はおいしかったなあ。」

私は、はっとしました。何でも簡単に手に入る現代、ものの大切さや食のおいしさ、ありがたさを忘れてはいないか…。誰かが野菜を作ってく

くださる。誰かが水を引いてくださる。だからこそ、私たち人間は、生きていくことができるのです。人間は皆、支えあって生きているのにそのことの重大さ、素晴らしさを忘れてい

るのではないのでしょうか。私は「うんめえ水」を通して、大切なことに気付かされました。きっかけは、我が家の井戸水。祖父のおかげです。これからは、水、そして人にもっと感謝していきたいです。

私の家にある二つの蛇口。一つは上位道の水。もう一つは、おじいちゃん

の思い出がつまった水。井戸水なんて、今時珍しいかもしれません。しかし、私はおじいちゃんの思い出とともに「うんめえ水」を私の子供たちにも、未来へも引き継いでいきたいです。

入選

平等であるべきもの

山梨県

山梨大学教育人間科学部附属中学校一年

小平

守莉

「ゴクゴクゴク。」喉をならし水を飲む子供達の写真に僕は言葉を失った。子供達がすくい上げるその水は、僕が普段口にするような清水ではなく、茶色く濁った泥水だったからだ。ソマリアの子供達を映したその写真に僕はふつふつとした怒りと不安を覚えたんだ。「命は平等だ。」小さい頃から両親に教えられてきた教えは自分が大人になっていくにつれ嘘っぽく思えるようになっていった。蛇口をひねれば安全な水を好きなだけ飲むことの出来る僕の命と喉をうるおす為に泥水をすくい上げるソマリアの子供達の命は果たして平等だと言えるのだろうか？命の価値は同じでもその命を取り巻く環境は全く違う。ガリガリにやせ細ったその手にすくい上げる命をうるおす為の泥水はソマリアの子供達にとってはまさに命を救う聖水に違いない。でも、蛇口さえひねれば安全で清潔な水を飲む僕にとってその水は泥水にしか見えないのだ。

「ほら、ぼけつとしてないでさっさとペットボトルを持ってきて。」母の大声で我にかえると、僕は庭の片隅においてある「おすそわけの水」が入ったペットボトルをいそいで母に手渡す。雨水をためたそのうす茶色に濁った水は植木の葉をすべり落ち乾いた地面へと吸い込まれていく。葉をすべり落ちる雨水はキラキラと光りを反射して宝石みたいに見える。「きれいだね。」お母さんがニンマリ笑いながら僕の手に空になったペットボトルを渡す。「水はすこいよね。空から降ってきて、こーやって命をうるおしてまた空に帰って行くんだから。」母の言葉に僕はドキッとした。「じゃあ、何故ソマリアには雨が降らないんだよ。」僕の怒声に母は少し驚いた顔をしたけど、すぐに「じゃあ、君はソマリアの為に何をしたらいいんだろうね。」そう静かに笑ったんだ。「守莉、ちよつといい？」会社から帰宅した父が僕に紙を渡してくれた。そこにはソマリアに井戸を掘るユニセフの活動についての記事があった。「残念なことだけど、日本みたいに水道が整備されている国は世界に少ないんだ。自然環境の問題

や国の問題で干ばつに苦しんでいる人達がたくさんいるのも事実だよ。でもね、そういう国の人達を手助けする為に国際水協力年を設けて活動しているんだ。それが今年なんだ。」父は大きな手を僕の頭の上のせる。「守莉は世界の水の為にまずは何をしたらいいと思う。」そう言うとポンポンと頭を軽く叩いたんだ。父の言葉がとても重く感じた。だって僕は頭の中で色々考えるだけで何一つ行動に移していなかったからだ。

「お父さん、僕雨水タンクを作ろうと思うんだけど。」数日後僕は父に自分の考えを伝えたんだ。今すぐあの泥水を飲む子供達を救う事は出来ないけど、何もせずに不満ばかり口にしても仕方ないと思ったからだ。そうまずは資源である水を有効に無駄なく使う事からはじめればいいんだ。お風呂の残り湯は三年前からトイレの排水へと利用している。節水にだってかなり気を使っている。もちろん今までだって雨水をおすそわけの水として利用してきた。でももつと僕に出来る事があるはずだ。そしてたどりついたのが雨水タンクだった。父はにっこりと笑うと「よし、今度雨水タンクについて一緒に調べようか。」そう言って僕の頭をポンポンといつもみたいに軽く叩いたんだ。

国際水協力年の今年だからこそ、僕は考えなくてはいけない。蛇口をひねれば安全できれいな水を飲めるといふ幸せを、そして同じ命の重さを持つ多くの人達が今、水を飲むことができず干ばつで苦しんでいるという事を。

命はみな平等だ。でもそれを取り巻く環境は決して平等ではない。だからこそ多くを知り学び考え行動するんだ。平等であるべき命を守るために。

入選

三・一一をきっかけに

三重県 高田中学校二年 隅田 五鈴

それは、ある一通の手紙から始まった。

平成二十三年三月、家に一通の手紙が届いた。宮城県に住む友達からだった。そこには、東日本大震災の被害の大きさ、今の生活状況などが書かれていた。その中のある文章を読んだ時、私は自分の目を疑った。

「三月十八日現在でもお風呂にはまだ入れません。三日に一回洗面器一杯の水で頭を洗います。水くみは二日に一回、とても大変です。」ありえない、と思った。お風呂に入れない？水くみ？自分の生活からは想像もできなかった。信じられなかったが、でもこれは本当に起きている事なのだ。外国ではない、自分の住んでいる、この日本で。

「今したいことは、お風呂に入って体を洗うことと、トイレの水を思いつきり流すこと。」この文を読んだ私は、今まで好き放題に水を使ってきた自分を恥じた。そして、被災地の人々に失礼にならないよう、自分もこれからは水を大切にしなければならぬと考えた。

それから、私の水の使い方は明らかに変わった。トイレの水は「小」で流し、食器洗いではなるべく汚れを落としてから水洗いし、手洗いの際に石鹸を使っている間は水を止めるように心がけた。今となっては「なぜそれまでできていなかったんだろう。」と思う程に当然で簡単なことばかりで、誰にでもできることだ。しかし、こんな簡単なことでも、意識して行わないと忘れてしまうというのを私は知った。また、「水の無駄使いはいけない」と分かっているのに、水を大切にしようという強い気持ちが必要なら、なかなか実行できないということも知ることができた。

そもそも、私達にとって『水』とは何だろう。私達が水と関わる機会は数え切れない程ある。飲み水、お風呂やトイレの水、洗濯の水、料理の水……。家の中だけでもこれだけ多くの水を使っている。他にも、工業、農業などでもたくさんのお水が必要とされる。事実、私達は水がないと生きていけない。だから、水は私達の生命を支える、とても大きな存

在だと思う。そんな水を、規制がないからと言って使いたい放題に使うのは、あまりにも無礼ではないか。

約四十年前、川の汚染の原因の大部分は工場排水だったと本で読んだことがある。それが今では、原因のほとんどが生活排水になってしまっている。工場には様々な規制が作られたが、生活排水には規制が無いからだそう。私達は、少しでも水をきれいにするために、自分の心に規制するべきだと私は考える。自分の命を支えてくれている水を大切にするのはごくあたりまえだ、と考えるのは私だけではないはずだ。そのような人々が周りに呼びかければ、きっと、少しずつでも周囲の水はきれいになる。そして、きれいになった水は、私達を心地よい気持ちにさせてくれる。これが循環することが、人間と水との関係の理想だと思う。

私達は水資源の豊富な日本に生まれたからこそ、飲み水に困ることもない。でも世界には、きれいな水を飲むことさえままならない国がある。そんな国の人々のためにも、私達は水を大切にしていかなければならない。東日本大震災で、私達日本人は改めて水の大切さ、きれいな水のありがたさを知ることができた。これをきっかけに、多くの人々が水を大切にしようという意識を持つて努力すれば、きっと日本の河川はもっときれいになるし、川がきれいになれば海だってきれいになり、そうすれば世界の海がきれいになることにつながるはずだ。

東北の友達からの一通の手紙は、私に水について考え直す大きなきっかけとなった。私達は今一度、自分と水との関わりや水の重要性について深く考え直すべきではないだろうか。

入選

つながる水

滋賀県 長浜市立西中学校二年 是洞 光南

私の住んでいる長浜は、水と深い関わりがある。街の中にはたくさん
の川が流れ、いたるところにわき水が出ている。少し歩けば日本一の湖
「琵琶湖」があり、文字通り水に囲まれた街である。

私の家のそばにも「十一川」という川が流れている。小学五年生の夏、
ふと「この川はどこから流れてきてどこに行くのだろう」と思い、調べ
たことがあった。自転車で川沿いを流れに逆らったどつていくと、車
がたくさん走っている道の横を通っていたい、家と家の間を通っていた
り、静かな神社の横を通っていたり、田んぼの横を通っていたりと、川
は様々な場所を通って流れていることが分かった。ついに、道の下にも
ぐってしまつて、どこから川が始まっているのかということまでは分か
らなかつたが、たどつていく途中、川が太くなつたり、細くなつたり、
まっすぐだつたり曲がりくねつたり、さまざまに変化するのもおもしろ
かつた。

次の年の夏は、この川の水と水生生物の関係を調べることを自由研究
にした。同じ川なのに場所によつて住んでいる生き物が違つていた。指
標生物の表で確認すると、「きたない水に住む生物」とされる生き物がい
る場所もあり、少しショックだつたのを覚えている。「きれいな水」と「き
たない水」に住む生き物に違いがあり、人間が見た目では分からない水
の汚れを、小さな生き物たちがちゃんと分かっていることにもおどろい
た。

そして、昨年は空気の汚れと水の汚れの関係についても調べてみた。
水が汚れているところは空気も汚れていることがあり、深い関係がある
ように思つた。

私たち人間が使っている水は、ほとんどが消毒されている水である。
清潔で安全な水は私たちの生活に必要なものだけれど、裏を返せば、今、
川や湖の水をそのまま使うことができないほど汚れていることが多いと

いうことではないだろうか。小さな生き物たちはそんな川の中で生きて
いる。人間が水を汚せばその水の中で生きていくしかないのだ。もちろ
んその水に住めない生き物は死んでしまうだろう。川の調査をしている
途中でも、ポイ捨てされたカンやお菓子の袋、スーパの袋などたくさ
んのゴミを川の中に見つけた。人間は自分たちで水を汚しておきながら
その水を消毒して自分たちだけ安全な水を使おうとしているように思え
た。

水は人間だけではなく、虫や動物、植物などすべての生き物にとつて
必要なものだ。もちろん昔のように川の水をそのまま使えるまでに戻す
ことは不可能だとは思ふが、少しでも生き物たちが安心して使える水に
近づけることができれば、それはきっと人間にとつてもより安全な水に
なるに違いない。

川が山から流れ出て、街のいたるところをつないでいるように、人間
もほかの生き物たちと、水でつながっている。私たち人間が都合よく水
を使うのではなく、少しでもつながっている生き物たちのことを考えな
がら生活することが求められている。

小さい頃、私は近くの公園のわき水で姉とよく遊んでいたそうだ。こ
れからもそんな水に囲まれた生活ができるように、そして水に近い街に
住む人間として、川の様子や水の汚れに関心を持ち続けたい。また、水
をよごさないために「洗剤を使いすぎない」など小さなことから私も協
力していきたい。

入選

「蛇口の向こう」に見えるもの

京都府 京都市立伏見中学校三年 岡本 みい

私が小学校三年生の時だった。いとこの結婚式のために親戚一同が大
きな旅館に集まって、盛大な宴会を催した。宴がたけなわになった頃、
祖父が「この旅館にあるもので、一番欲しいものは何だい？」と問いか
けた。

大人達は酔っぱらって笑っているだけだったが、私達子ども連中は旅
館中を走り回ってあれがいい、これが欲しいと品定めを始めた。

一番人気は当時はまだ珍しかった大型テレビで、半分以上が希望した。
二番人気は私も選んだカラオケで、「タダで練習できる」と大はしゃぎだ
った。お父さんのためにと「シャワートイレ」や「マッサージチェア」
を選択した孝行息子もいた。

ドタバタが一通り落ち着いたところで、私達は祖父を囲んで「おじい
ちゃんは何がいいの？」と問いかけた。すると祖父はきっぱりと「私な
ら絶対にあれがほしい」と部屋の片隅を指さした。私達が祖父の指先に
目を走らせると、そこには小さな洗面所があった。私達はいぶかしそう
に首をかしげた。なぜならば、そこには何の変哲もないごく普通の洗面
所があるだけだったからである。洗面台が純金製とでもいうのなら話は
わかるが、この洗面所のどこに魅力があるというのだろう。私達はおず
おずと「あんなもの、どこがいいの？どこにでもあるじゃない」と尋ね
てみた。すると祖父はこんな話をしてくれた。

「私がほしいものはあそこにある蛇口なんだよ。昔、日本に発展途上
国から子どもの使節がやってきた。子ども達は見るもの聞くものすべて
に目をまるくしていたそうだ。それはそうだろう、まだ電気もないとこ
ろからやってきたのだから。その子ども達がいよいよ明日帰国するとい
う夜に送別会がひらかれた。司会者が『この部屋にあるものの中から、
一つだけ皆さんにプレゼントしましょう。何がいいですか』と問いかけ
た。すると子ども達全員が迷わず水道の蛇口を指さして『これがほしい』

と言ったのだ。日本側の出席者はテレビなどの近代的な工業製品を予想
していたので、その答えに驚いたそうだよ・・・」

私達は口をポカンとあけて祖父の顔を見つめていた。心の中で「水道
の蛇口のどこがいいの？つまらない」と思いながら。

祖父は話を続けた。「水道の蛇口からきれいな水がふんだんに出てくる
というのは世界でも珍しい、とても恵まれたことなんだよ。水道の水が
飲めない国はいくらでもあるし、それどころか毎日川へ水をくみに行く
ことが子ども達の日課というところだってある。私達は当たり前のように
水道を使っているけれど、もし蛇口から水が出てこなかったらみんな
は生活できるかな？」

そう言われてみれば、蛇口から水が出てこなかったら幸せな生活など
到底不可能である。水が飲めないだけではない。手が洗えない、食事が
作れない、お風呂に入れない、トイレが使えない・・・つまり水道が
なければ私たちは生きていくことすら困難になってしまうのである。そ
う言えば、発展途上国で幼い女の子が歯をくいしばって大きなバケツを
持ち、水を運んでいる姿をテレビで見たことがある。

使節団の子ども達は蛇口の向こうに何があるのかを知らないまま「蛇
口が欲しい」と言ったのだろう。確かにちよっとひねるだけできれいな
飲み水がふんだんにあふれてくる蛇口は、水道がない国の子ども達にと
っては不思議であり、憧れであったに違いない。

翻って私達は蛇口からほとぼしる水に感謝をしたことがあるだろうか。
あるいは「蛇口の向こう側」について考えたことが一度でもあるだろう
か。私は祖父から素晴らしい日本の「水環境」に誇りと感謝の念を持ち、
蛇口からしたたる一滴の水を大切にしなければならぬということを教
えてもらったような気がしている。そしてこの意識は、全ての日本人が
共有すべきものであると考えている。

入選

日本の水の使い方

京都府 龍谷大学付属平安中学校二年 桜井 萌

「地下水」というものがあります。

地下水とは、雨水などが地中深くまでゆっくりと染み込んできた水のことです。つまり、天然のフィルターを何年もかかって通り抜けたきれいな水、ということですよ。

もう何年前のことでしょうか。当時小学校低学年だった私は、夏休みに父方の祖母の家を訪れました。外から帰ってきて手を洗ったときの水が冷たくて心地良かったことを、今でもはっきりと覚えています。驚いていると、祖母が教えてくれました。

「この辺の水道の水は、井戸から汲んできた地下水を使っているんだよ。消毒の薬も入れていないから、飲んででも美味しいんだよ。」

と。飲んでみると、本当に薬の味はせず、そのまま三杯ほど一気に飲んでしまいました。

後で、その時のことを母に話して、「冬は大変そうだね。」と私が言うのと、母は、そうではなく地下水は夏は冷たく冬は暖かいのだそうだと教えてくれました。私は、それは地下室などと同じ原理で、気温に左右されない深さにあるからだと思います。父に尋ねてみても、答えは同じでした。

そんなに良いものならば、水道の水は全て地下水にしてしまえば良いのではないか、と思いました。しかし、そうしてしまうと水を安定して得られなくなったり、地盤沈下が起こってしまいます。地下水は、増えるスピードが非常に遅いからです。ということは、やはり川や池などからの水を取ってくるしか日本で水をまかなうことはできないのでしょうか。

それは、ある程度は仕方ないことです。生き物にとって、水は食料よりも大切なものです。けれども、今の水の量が絶対に必要であるとは思えません。特に、家庭で使用する生活用水の量は、私の家は多過ぎる

気がします。おそらく、他の家庭でもそうなのだと思います。と言うより、「水は限りがある貴重なものだ」という意識が人々の中から薄れてきているのだと思います。そのことを呼びかけるポスターもよく見かけますが、結局は、皆他人事になってしまっているのです。

その状態を打開する為に、少し過激ではあるかもしれませんが強制的に水が今よりも足りない状況をつくり出すと良いのではないかと思います。もちろん事前に調査して、例えば震災の影響が大きいところは除くなどの配慮は必要です。それを年に一回「水の（ありがたさを考える）日」として実施したらどうでしょうか。それくらい危機感を感じれば、他人事では済まなくなると思います。

今の日本では、水道がとても普及しています。日本の水道の水は世界的にも水準が高いそうです。しかし、沢山の水を自由に使えることが「豊か」なんでしょうか。私は違うと思います。私は、自分の環境が恵まれていること、例えば水を沢山使えることなどに感謝し、一滴一滴を大切に使える優しい心こそが「豊か」なのだと思います。

今後も、私はそんな「豊かな心」を持って大切に水を使っていきたいです。それと共に、周りの人にも、そんな心を持って欲しいと思います。

入選

「世界の水問題」

京都府 立命館宇治中学校一年 渡邊 優里菜

毎日の生活で欠かせない水。飲み水や料理として私たちの体に直接取り入れられるのはもちろん、お風呂や洗顔・トイレの水や洗車など、生活のあらゆる面で、蛇口をひねれば、すぐに出て来る水。厳密に言えば水道代がかかっているかもしれないけれど、ジャーツと毎日、当たり前のようにタダで出てくる水について、私はこれまで深く考えたことは、ありませんでした。

「水が原因で年間五〇〇〇〜一〇〇〇万人が死亡」「十二億人が安全な飲料水を確保できない」「八億人が一日二〇〇〇キロカロリー未満の栄養しか摂取できず」「三十億人が十分な衛生設備を利用できない」「二〇二五年には四十八ヶ国で水が不足する見込み」

これは、今回私が作文を書くために何げなく訪問した京都府ホームページの「世界の水問題」に記されていた水問題についての見出しです。記事では、すでに世界人口が六十億人を突破した今、水不足が増大しており、世界人口の二十パーセントが安全な飲み水を確保できず、現在、世界三十一ヶ国で水が絶対的に不足し、また水不足によってもたらされる深刻な食料不足に悩まされる地域が拡大しているそうです。考えてみれば、畑で穀物や野菜を作るにも、家畜を育てるにも、水は必要不可欠です。水不足によって食糧も不足するなんて、当然の常識でしょうが、これまでそんな考えには思い至った事ありませんでした。

また、二〇二五年には世界の人口が八十億人に達すると見込まれ、今よりもさらに深刻な事態が予想されるそうです。京都府のホームページを見て、世界の水問題について、もっと知りたくなった私は、JICAのホームページにアクセスし、TVでおなじみの池上彰氏と水問題の権威で「水文学」の専門家である、東京大学教授・沖大幹氏の対談を見つけました。その中で「安全な水資源を利用できる割合」という世界地図があり、百パーセントの国民が安全な水資源を確保しているのは、日本

のほかにアメリカ・カナダ・オーストラリア、そしてヨーロッパ諸国の一部の国だけでした。エチオピアやモザンビークなど安全な水を利用できるのが二十五パーセントに満たない国やデータ自体がない国もありました。

また、水の問題は飲み水や食糧の確保という「命の問題」だけでなく、「水汲み」という重労働のために子どもが学校に行けなかったり、女性の社会進出が妨げられるという社会的な問題があることも知りました。ほかにも、水から感染する赤痢やコレラなどの病気や水質汚濁の問題。貧困により安い土地に家を建てては洪水によって流されてしまう洪水被害の問題。ポンプ技術が進歩したのはいいけれど過剰な地下水のくみ上げによって地下水が減ったり、地盤沈下が発生しているという現実。さらに地下水の減少によって、河川の水も減り、砂漠化や地球温暖化にも影響し、それが生態系にも影響してくる・・・。世界の水問題の現状を知ること、今まで知らなかった世界の諸問題の一端を知るきっかけになったと思います。

私は今回、『世界の水問題』について調べて、自分たちがいかに恵まれた環境で暮らしているのか知ることができました。ついこの間まで「水道水はおいしくない。」と言っていた自分。そんな自分が恥ずかしく思えました。蛇口をひねれば、すぐに出てくる水。それは今まで当たり前だと思っていました。世界的に考えれば、限られた国だけに許された”ぜいたく”だと知りました。水問題の現状を知ること、それは遠いよその国の問題ではなく、地球全体の環境にも関わることです。豊かな国の住人こそ、この現実を知り、世界全体で考えなければならぬ問題だと思えます。

入選

命ある水

大阪府 大阪教育大学附属池田中学校二年 今川 結帆

中一の歴史の授業で、畿内の旧国や国境について学んだ。そこで、どのようなものが国境になり得たのか興味を持った私は、春休みに大阪府三島郡へ出かけた。

まず最初に西天王山の中腹にある若山神社を訪ねた。鳥居をくぐり、長い階段を上ると、清々しい風が私を迎えてくれた。美しい境内からは、桂川・宇治川・木津川の三川合流地点を望むことができた。

次に、関大明神社へ向かった。大阪府三島郡と京都府乙訓郡を分ける府境にその神社は存在した。小川はどこだろう、そう思って目を凝らすと、水の流れる音が聞こえてきた。それは、車が通り過ぎた後、耳を澄まさないと聞こえないようなかすかな音であった。

音をたどると、神社に沿って、その流れを認めることができた。何と繊細な小川であろう。しかし、その流れは力強かった。雪解け水を運ぶかのように絶え間なく流れていく小川。これが、昔の摂津と山城の国を分ける国境であり、現在の大阪府と京都府を分ける府境なのだ。何百年もの時を超えて、その存在感を見せてくれたような気がした。

この関大明神社の近くには、日本三古橋の一つである山崎橋があったと通りすがりの人が教えてくれた。行基が架けたと伝えられているその橋は、たびたびの洪水で流され、とうとう再建されずに現在に至っているという。このことを踏まえて、次に向かったのが淀川である。淀川は、琵琶湖から流れ出る唯一の川であり、大阪湾へ注ぎ込んでいる。大阪市や京都市という大都市、そして、阪神工業地帯を支えているのが、この淀川である。その大いなる淀川は、想像以上に川幅が広く、流れも緩やかであった。先ほどの府境である小川とは対照的である。ここに山崎橋があったのだという感慨も重なってか、しばし川面を眺め続けた。

水道水の原料となる「水」。川の水や海水は太陽の熱で温められ、蒸発し、雲になって雨や雪を降らせている。雨や雪は再び川に注ぎこみ、生活用水

や工業用水、農業用水となって、最終的にはまた海へとたどり着くのである。つまり、「水」は地球を循環していると言える。

循環水の中でも大きな役割を果たしているのは、緑のダムと呼ばれる森林である。森林は、その根に上手に水を貯え、地下水流を作ってくれているのだ。

このように考えると、「水」という自然の恵みがないと、私たちの生活は成り立たない。飲料水という大切な役目だけでなく、汚れを取り除くという大切な役割も担ってくれている。私たちが衛生的に暮らせるのは、水のお陰である。手洗いは、ウイルスや細菌感染を予防する有効な手段だからである。

私たちにできることは、水を汚さないという努力をすることである。例えば、絵の具や習字の筆の洗い方を工夫すると、我が校だけでも約四八〇名分の水の無駄使いをなくすることができる。不要な紙などでふき取ってから、洗うように心がけると、水の使用量は半分になる。こうして、水の貯金をしていくと、水の自浄作用により、美しい川を維持できるのではないだろうか。

七〇億人もの人間とその人間をとりまく万物の命を支えているのは、他でもない「水」なのである。大切なのは、その「水」の有難さを再確認し、「水」についての学びを深め、「水」の管理を怠らないことではないか。なぜなら、「水」は、生活に必要不可欠なだけでなく、豊かさや恵みと健康をもたらしてくれるからだ。

今一度、「水」に感謝したい。そして、その「水」を守り、自然を守るのには、私たち自身であり、それをするのは「今」しかないということ肝に銘じたい。

入選

「やっぱ好きやねん、夙川」

兵庫県 西宮市立大社中学校三年 投石 萌

夙川は私の家のすぐ近くを流れる川だ。歩いて二分、走って一分。桜を楽しみ、つばめを見あげ、水遊びを楽しんで大きくなった。川原は車の通らない安全な場所で、走り回ったり、草花を摘んだり、虫を取ったりするお気に入りの場所だった。心の中に残っている思い出には家族と一緒にいつも夙川の水がキラキラ輝いて光っている。そんな感じだ。さらに、母は、私がお腹にいる時も兄と一緒によく夙川を歩いたと言うから、夙川と私は本当に長いつきあいだなあと思う。

そんな私が四歳の時、家族と一緒に家のすぐ横を流れ夙川に続く小さな用水路でホタルを見つけた。暗闇の中で光るたった数匹のホタルだけだったが、その感動は家族四人とも今でもはっきり覚えている。夙川本流にも行ってみると、それまではもつと上流でしか見られなかったホタルが飛んでいた。ホタルはこんな都会では見られるわけではない。父や母でさえそう思っていたのに。翌日もまた翌日も、ホタルを確かめに行くうちにホタルから目が離せなくなった。これが始まりのホタル調査は家族で毎年続けて、今年十一年目になる。

五月連休明けから七月初旬まで約二ヶ月間、毎晩八時にホタルの数をカウントし、天気や気温、ホタルの数を記録する。ただそれだけの単純な調査だけれど、毎晩欠かさず続けることは結構大変だ。毎日となると、家族で予定を確認しあうことも必要になる。大雨の日や見たいテレビがある日も、部活でヘトヘトの日も観察は続く。正直、面倒くさいなあ、もう今年で終わりにしたいなあと思う時もあるが、家族皆の協力でここまで続けてきた。

また、夙川のホタルを見にいくうちに地域のひとと知り合い、色々な話を聞かせてもらった。あるおじいさんは、子供だった頃はこの夙川で泳いで遊んだけれど、二十数年前は臭くて汚い川だった。今ホタルが住めるぐらいの水質になったのは下水道が整備された事や地域の人たちの努力があったからだと話してくれた。私はそこまで汚れた夙川は知らない。

でも、一度汚れてしまった川をまた元のきれいな水に戻すのは大変な力が必要だということがおじいさんの話から伝わってきた。だから、夙川を二度と汚してはいけないと思った。

そこで、夙川の水質調査にも取り組み始めた。毎年ホタルシーズンが終わった七月末に夙川の上流から河口までポイントを決めて水質を調べている。暑いけれど、夙川の水がホタルが住めるぐらいのきれいさが保たれていることを確かめる事は、もはやうちの家族の年中行事だ。そして、ホタル調査と水質検査を合わせたデータを自由研究などで発表しているうちに、近所の人から「もうホタル出てる？」とか「今年もがんばって」と声をかけられることが増えてきた。ちょっと恥ずかしいけれど、水やホタルに興味を持ってもらえることはとてもうれしい。

「夙川はどこで生まれるの？」それが知りたくて、家族で地図を見て夙川の源流を探しに出かけたことがある。山に入り、細くなった溪流沿いを登っていくと、六甲山系には災害を防ぐための砂防ダムがたくさんあった。本当の源流まで行けなかったが、安全を守るための工夫を知ってまたひとつ夙川にくわしくなった。こんな風にいつのまにか家族皆で楽しんで夙川に関わっている。

阪神間の川の中でも、夙川は川の整備管理とそのままの自然がうまく調和された川だ。でも、夙川のような小さな川でも、大雨が降ると濁流がすごいスピードで流れる。川の危険を理解し、自然とうまくつき合いながら、私たちの生活を豊かにしていきたいと思う。

生物が生きていくためには水は絶対に欠かすことができないが、それだけではない。水は体も心も癒す存在だ。夙川はホタルや魚だけでなく人にも鳥にも虫にも優しい。

やっぱ好きやねん、夙川。私たちが大人になってもずっとそう言えるように、今の夙川を、キラキラ輝く水を大事にしたい。

入選

神様からの贈り物

奈良県 天川村立洞川中学校二年 小屋 香菜子

「お父さんな、小さい時から不思議に思ってる事があるねん。大峯山でっぺんに小川が流れてんねん。ずっと気になってん。」

「へー。写真取ってきてよ。」

私はある日の父の話に興味をもち、その小川のことを知りたくなりました。た。

大峯山は昔から修験道でもあり世界遺産に登録された大峯奥駈道のうちの一つです。女人禁制で私は登れないので父に頼みました。

この小川を考えるうちに、いろいろな想像をしました。小川はお堂の近くに流れているとのことなので、私は修行する人のご神水なのかなとふと考えました。水は、土や砂ならしみ込んで下に行くのですが、岩にあたるとしみ込んで行く場所がなく湧いてくるようです。大峯山は岩山なので、水が湧いてきたと考えられます。なぜ岩山の山頂なのに、水がかれないのか不思議に思い父に聞いてみました。

「この洞川が、緑に恵まれ木の根が水を保水してくれるからかな。それに、紀伊山脈は日本でも雨量が多いから、たまたま条件が重なったんかな。」という話でした。

私は父からこの話を聞き、どうしてもその小川が見たくまりました。だから、龍泉寺という洞川のお寺に、写真がないか訪ねに行きました。写真はありませんでしたが、院主さんにお話をうかがうことができました。

院主さんのお話では、小川は千年以上前から流れているそうです。山の中に水脈があり、表に出る事は滅多にないそうですが、たまたま出たのがこの小川だと言うことです。だからそこに、宿坊を造り昔はその小川の水を参詣者が使っていました。今は宿坊がないため使われてないそうです。院主さんもここに小川が流れているということが不思議に思っているとのことでした。

地層の科学でいえば、たまたま小川になったのでしようが、話を聞いて

私にはやはり意味のあるご神水に思えました。

私の住んでいる洞川は山間へき地の小さな村にあり、水の綺麗な所で名水百選に「ごろごろ水」「泉の森」「神泉洞」と二つも選ばれています。

その中で今回は、昨年もらった川の水調査セットを使い、「ごろごろ水」「泉の森」の水質について調べました。

川の水調査セットでは、「COD」、「アンモニウム態窒素」、「亜硝酸態窒素」、「硝酸態窒素」、「りん酸態りん」の五項目を測ることができます。この五項目では、水が綺麗か汚いか判断することは出来ません。しかし、この測定値から色々なことが分かります。

五項目のうち「アンモニウム態窒素」、「亜硝酸態窒素」、「硝酸態窒素」の三つからは、上流やすぐ近くで汚れが流れ込んでいないということが分かるそうです。「りん酸態りん」では、外から急激に食べ物のカスや肥料などの汚れなどが入ってきていないことが分かります。「COD」からは、水の中に反応しやすい物質があることが分かります。両方の水とも、どれも無色透明に近く汚染が少ないことが分かりました。

洞川では水源地という自覚もあり、なるべく生活排水を流さないように下水処理場を建てました。しかし、聞くところによると全国にはまだまだ汚れた河川があるようです。それは、大気汚染・生活排水・生態系の変化など要因はたくさん考えられます。

私たちは豊かな水は当たり前ではなく素晴らしいものだということをおぼえていますか？

大峯山にできた小川は、生きる原点の水だからこそやはりご神水だと思います。水源地に住む私たちは、水を守るためにまず緑や自然を守っていきましょう。

そして、みなさんが水の大切さを改めて確認し、自分たちの生活を見直す機会を持ってくれれば嬉しいですね。

入選

「安全な水を飲み続ける為に」

山口県

山口大学教育学部附属山口中学校三年

岡村

智聖

日本は「資源がない」とよく言われるが、水も立派な資源だ。しかも、ただあるだけではない。生活用水、工業用水、農業用水、飲料水、もつと言えば、軟質、硬質、産地別等、日本人は、用途に応じた水を「選んで」使っている。私達は、そう出来る環境に感謝し、もっと大切にすべきだと思う。

日本人の技術者が、水不足に困っている国へ行き、井戸を掘っているのをテレビで見た事がある。その村の唯一の水場は、約十キロ先の川なのだ。女の人や子供達は、頭に大きな桶をのせ、歩いて水を汲みに行く。当然、帰りは、水の入った桶が頭上にくるのだから、かなりの重労働だ。だが、その人達には、それが「日常」であり、そうしないと生きてはいけないのだ。その上、乾季には川の水が減る。その時期の水汲みは、更に大変で、誰かが水汲みをした後、水が溜まるまで、二時間位かかるそうだ。まさに水汲みは、一日仕事だ。水汲みの為、学校へ行けない子供もいるという。日本では考えられない理由だ……。

そこまでして得た水だが、薄茶色に濁っていて、私には、とても飲み水には見えなかった。しかし、村人は、その水をとても大切に使う。その水を迷う事なく鍋に入れ、食事を作る。桶の中で水がこぼれないよう注意しながら食器を洗う。そして、バケツにたった一杯の水を使って、お母さんが、三人の子供達の全身を、石鹸で丁寧に洗ってあげていた。この入浴は、日曜限定で、子供達は、この一週間に一度の「贅沢」をとっても楽しみにしていると言っていた。

日本で災害が起きて、水が不足しても、ここまで「泥水」を大切に大切に扱う人が果たしているだろうか……。日本では、いたる所に水はある。しかし、「飲める水」は、自然のものではない。水道から出る水、それは、殺菌消毒がなされ、様々な検査が行われた「安全な水」なのだ。

病原菌のいる水を飲めば、死ぬことだってある。しかし、私達は、そういった心配をする事なく、日々、当たり前前に「安全な水」を、蛇口をひねるといふ、いとも簡単な行為で手に入れる事が出来ている。それが如何に幸せな事なのかという事を感じずにはいられなかった……。

私の祖母は、広大な畑を一人できりもりし、野菜や果物、花等を出荷していた。無農薬、無除草剤が祖母のモットーだった。

「虫も食べんようなもん、人が食べていいわけないじゃろ。草も手で取ったらい。除草剤が土に染み込んで井戸水に入ったら大事よ。蛇口から出る水は井戸水なんじゃけえ、結局は、自分達に害が及ぶ。土を作ってくれるミミズだって死んでしまう。池の湧き水に混ざったら魚だって死んでしまうし、ワサビだって皆、駄目になる。土も水も生き物じゃけえ、具合が悪くなる事も、死ぬ事もある。土や水が健康で安全なものではないと、そこで育つ野菜や果物も安心して食べられんじゃろ。安心と安全を手に入れる為には、手間を惜しんじやいけんよ。」

畑の手伝いをすると、よく祖母は、そんな話をしてくれた。祖母は、二年前に他界してしまつたが、祖母の教えに従い、我が家では無農薬、無除草剤を続けている。

日本では、水に恵まれ過ぎて、水に対し、無頓着な人が多い。飲食店に入れば、水は無料、公園等にも水飲み場がある。しかも、ただの水ではなく、冷水やイオン水が無料で飲めたりする。私の通う中学校にも、各階に一台ずつ冷水器が設置されており、夏場、とても重宝されている。

この様な恵まれた環境も、皆が意識して守っていかなければ、いつか終わりがくる。蛇口をひねるのは簡単でも、その水の安全を保つのは簡単な事ではない。その事を一人一人が認識し、考え、行動することが、安全の継続に繋がるのだと私は考える。

入選

那賀川がもたらす水の恵み

徳島県 那賀町立木頭中学校三年 谷 結羽

守りたい。美しい木頭の清流、那賀川を。こんな風に考えるきっかけを私にくれた叔父の言葉に感謝したい。

「やっぱり木頭の水は違うな。」

香川に住む叔父が母の実家を訪れ、食卓を囲んだ時にもらした一言。「水がいいけん、ご飯もうまいわ。」と続けたそう。

この話を聞き、米本来の美味しさなど意識したことのない私は衝撃を受けた。水によってお米の味は変わるのだろうか。母が作ってくれたご飯を食べながら、叔父の言葉の意味を私なりにかみしめていた。

水は水蒸気や氷など形を変えながら地球上を巡る。全ての命の源であり、私たちの生活を支えてくれる大切なものだ。このかけがえのない水についてもっと知りたい、私を育んでくれた水の歴史についてもっと考えたいと、私自身が強く求めるようになっていた。

私の住む木頭の用水路は、今から約八百年前、江戸時代の頃に作られたそう。当時、用水路作りは大工事であり、木頭のように短い用水路の多い地域は、集落が古いと文献にあった。機械のない時代、手作業で進められる工事は大仕事であつたと想像できる。

用水路が通ること、安定して水を自由に使えるようになる。生活が便利になる。用水路をつなげることは、人々の夢をつなげることであり、水は人々の願いをのせて流れていたのだと思つた。私たちの祖先は、用水路を通して引いた谷の水を、生活のあらゆる場面で使用し、役立ててきたのだ。

祖先と同じように、我が家も谷の水を引いて使用している。食事作りや洗顔、入浴、洗濯といった生活に必要な水。農業や植物の灌水のため水。日常生活で使用する水を、木頭の人には水道からではなく、谷の水を好んで使用している。谷の水、つまり、自然から与えられた恵みを最大限に有効活用している。

また、谷の水は私たちに多くの情報や力を与えてくれる。濁った水が

続く時は、大雨の影響が残っているから、山道を歩く時は注意が必要だということ。日照り続きの時は、いつも以上に水を大事に使おうということ。夏場、乾いたのどを潤してくれる冷たい水は、また頑張ろうという大きな力をくれる。このように、私たちは水と寄り添い、対話をしながら生活している。水は自然からの贈り物だ。

そんな私がふるさと木頭の自然を守るためにしている活動がある。四月の源流碑開き。五月の植樹活動。七・八月の育樹活動。十一月には、鹿の食害から木を守るためのラス巻き活動。十二月には間伐実習。地域や県民局など多くの方々のご協力もあつて、この活動は今年で十八年目を迎えた。

昨年のラス巻きの際、高専の先生が講師として来て下さり、「森を育てることが、水を豊かにし、川を守り、ひいては海を守ることにつながる。」と話された。つまり、美しい那賀川を守りたいならば、川にだけ目を向けていては足りないということだ。その地域の生態系の全てに目を向けることが必要なのだ。

今年のカシの苗を植樹した。このカシは、私が一年生の時、拾ったドングリの実から育てた苗だから、一層思い入れが強い。植樹した苗に、家からくんできた谷の水をたっぷりかけてあげた。同じように、私もたっぷりとお水を飲んだ。体が潤い、力が漲っていくのを感じた。植物も同じだろう。

目の前の川を守りたい、その思いを起点に循環が始まる。水が木を育て、育った木が川や海を守っていく。全ての命の源である水への感謝と敬意。美しい川と共に歩み続けたいという願いや、後世へ残さなければならぬという使命感をのせて、水は循環し続ける。

お昼は、母が作ってくれたお弁当だ。お米一粒一粒をしっかりと味わうことで、那賀川の水の豊かさや恵みを感じることができた。

入選

水に感謝した夏

香川県 宇多津町立宇多津中学校二年 大浦 理芳

この夏、祖母が、

「うちに井戸を掘ろうと思うんだけど。」

と話しているのを聞いて、

「どうして、うちに井戸が要るの？」

と不思議に思った。水道の蛇口をひねれば水が出てきて、食事、風呂、洗濯などの生活用水に何も困っていないと思う。

「生活だけじゃないよ。野菜作りにも水は必要だからね。」

祖母のこの言葉に私はハツとした。そうだ、農業にも大切な水だった。

私はこんな大事なことを忘れていた。

私の祖母はいろいろな野菜を作って出荷している。夏のこの時期はナスだ。夏は暑く、晴天が続くので、ナスに葉水をかけてやらなければ枯れてしまう。そのため、夏場は夕方から夜遅くまで水やりの作業をしている。雨が降らなければ、その作業を週に何度も行う。その度に軽トラックに載せた大きなタンクに水を一杯に貯めている。春や秋に収穫するブロッコリーにも水をかけている。冬の大根やまんばなどを収穫後、出荷するためきれいに水で洗っている。水は苗の植え付けのとき、害虫予防のときなどにも大量に必要だ。農業を仕事にしている祖母は私よりも水を大切に思い、井戸を掘って地下水を利用したいとかなり前から考えていたようだ。

井戸は、二日程で完成した。井戸といっても昔のような大きなものではなくて、直径数センチメートルの穴を掘って、ポンプを使って地下水をくみ上げるのだ。地下六メートルぐらいの深さらしい。たった六メートルで水が出るのか、祖母と私は不安だったが、地下水は量が減ることなく出続けた。地下水のことは知っていたが、くみ上げられた地下水を目の当たりにすると、

「地下水って、すごい！」

と思わず感動してしまった。早速、野菜や花の水やり、打ち水に利用した。

私の足の下に地下水が本当に存在するのだ。地中には帯水層という、地下水によって飽和している地層がある。この地層から地下水をくみ上げていくそうだ。我が家の井戸水もその地層からくみ上げているのだ。

地下水の大部分は大気中の水分が雨や雪などのかたちで地表面に降水となって降り、地中に浸透したものだ。地中に浸透した地下水は再び地表や海底に湧出る。海に流れこんだ水は、水蒸気となり、雲となり、また雨となって地上に降りそそぐ。水は循環しているということも本で学んだ。地下水は地球からの贈りものようだ。地下水のことを調べると自然の偉大さを改めて感じた。

また、地下水は全水使用量の約十二%を占めている。地下水の利用は予想以上に多く、私たちの生活でなくてはならないものになっている。

最近、日本では災害時の水源として井戸が見直されている。我が家の井戸も災害時に役立つ。

先日、テレビ番組で災害時に避難場所になる小学校近くの民家の人が災害時利用にと井戸を掘ったことが取り上げられていた。全国各地で井戸を掘って利用しているようだ。

このようにさらに地下水が重要視されてきている。地下水を大切に守るために私たちができることは、水を汚さないことと、水を無駄にしないことだ。一人一人が始めていかなければならない。私はゴミを放置せず、節水に心がける。

私はこれまで水が出るのがあたり前だということに慣れて水に対する感謝の気持ちを忘れていたように思う。この夏、我が家にできた井戸を通して水の大切さを改めて考えさせられた。

入選

水の重要性

長崎県 島原市立第二中学校三年 雪野 明里

「水」これは私たち人間の生活になくはならない大切なものです。しかし、地球上に存在する水の九十八パーセントは海水であり、私たちが飲める綺麗な水は、たった約二パーセントしか存在しません。日本はその約二パーセントの綺麗で安全な水を当たり前のよう使用できる恵まれた国です。けれど、こんな日本のような国はほんのわずかで、世界を見てみると深刻な水不足に悩まされている国がたくさんあります。なぜ、こんなに水不足で悩まされている国があるのでしょうか。

まず、世界の水不足の現状について調べてみました。すると、千九百年からの約百年間で、世界の水の需要量は十倍以上に達しているという事が分かりました。この水の需要量の増加の原因。それは、世界の人口増加とそれに伴う食料増産です。人口が増加すると当然のようにたくさん食料が必要になります。食料生産にはたくさん水が必要になります。それに加え、経済発展により食生活の肉食化が進むと、家畜の飼料として大量の穀物を栽培しなければならぬため、さらに水の需要が高まります。また、地球温暖化が進むと気候が変動し、降水量の変化や干ばつの影響を受ける地域の拡大が予想され、水不足を促進する恐れがあるそうです。

それでは、毎日綺麗な水を飲めない・使えない人はどれくらいいるのでしょうか。調べてみると、清潔な水を毎日飲めない人は約七・八億人。これは世界人口の約一割にあたります。また、トイレなどの衛生施設を継続的に利用できない人が約二十五億人。これは世界人口の約四割程度にあたります。この数字の大きさに私は驚きました。そこで、この水不足と汚染によって亡くなる人を調べてみると、約八秒に一人が死亡しており、その半分以上が発展途上国の五歳以下の乳幼児であることが分かりました。

私は生まれた国や環境が違うだけでこんなにも生活に差があるのかと

本当に驚きました。日本では、蛇口を捻れば綺麗で安全な水が出てくるのが当たり前になってしまっています。それに、昔と比べると水に対して『貴重なもの』という認識が低くなってしまっていると思います。それどころか、水の無駄使いが増え、節水を呼びかけないといけないほどです。それほど、私達は水に対して『貴重なもの』という認識ができていないということです。

私はこの水不足の現状を変えるためには、一人一人の水に対する意識改革をしなければならぬと思っています。島原のような日本の中でも水の豊富な地域は特にそうするべきだと思います。島原のようにあちこちで綺麗な湧水が出ていると、そうではない地域よりも水に対する『貴重なもの』という認識が低いように思われます。この現状を打破するための第一歩は、身近な人と共に水への認識を高めあっていくことだと思います。例えば、島原半島はジオパークに認定されるほど自然資源の豊かな土地です。その中でも「水」がもたらす力は大きいです。「島原の水が綺麗」となるほど、島原にとって水は代表的なものになりました。だからこそ、身近な人と共に水の貴重性を考え、共に水への認識を高めあうことが大切だと思います。そして、『身近な人』から『地域全体』へと広がり、さらに『島原半島全体』にまで広がったら素晴らしいことだと思います。「島原の水を大切にしている街」となるように。また、こう言われる街が増えてほしいと思います。水を守るために。

入選

大切な「水」を守るために

長崎県 長与町立長与中学校三年 末永 詩乃

「水」、それは私たちの生活において必要不可欠なものである。人間だけでなく、この地球上に存在する全ての生物は水に支えられて生きていく。しかしその水にも限りがある。いつでも清潔な水が好きだけ手に入る時代に生まれた私たちは、それを当然のこととして認識しているが、実はそれが一番の贅沢だと思う。

「今が良ければそれでいい」と思うのではなく、これから先のことも考えたうえで水を使うのが私たちの義務ではないのだろうか。株式会社ブランド総合研究所が行った「都道府県別エコへの取り組み調査」によると、「風呂や洗濯、食器洗いなどで節水を心がけている」という項目で該当者の割合が最も高いのは長崎県で五八・五パーセントだそうだ。

これは普段からの水に対する意識が高いということだ。この理由として、長崎という土地が水不足になりがちであることがあげられる。長崎県の河川は、流域が小さく急流であるため、水を貯留する能力が低いのである。そのため、昭和三十年代から四十年頃まで、「長崎砂漠」と呼ばれ、また、平成六年には大渇水が起こっている。このような長崎で暮らす人々は、水の大切さを身をもって感じているため、節水を心がけるようになったと考えられる。

また、長崎の人々を取り組んでいるのは節水だけではない。海水から塩分を取り除き、真水を作る海水淡水化施設を日本で最初に導入したのも長崎県の松島炭坑池島鉱業所である。池島には当時から、炭坑で働く人々やその家族が多く住んでいたが、その人々の生活に必要な水を得る池などがなかったため、海水を淡水に加工する設備が整えられた。

海水淡水化施設による造水は、臨海部では季節や自然条件に左右されることなく、需要に応じて造水し、安定的に供給することが可能である

ため、水資源確保の有望な手段の一つとして期待されている。

このように長崎では活発な取組が行われている。しかし大規模な取組だけではない。私たちが普段から意識して行えるものもたくさんある。

その例として、節水機器を利用したり、再生水や雨水を利用したりすることなどがある。再生水は、飲用水の水質基準を要しないトイレの洗浄水や樹木への散水、洗車など、身の回りで使える場面が意外と多い。

私たちは、日本という水資源の豊富な国に暮らしている。我が国の降水量は世界平均の約二倍であるし、まわりは海に囲まれている。しかし私たちは水が足りない水が足りないと言いたびたび言う。これは技術がないからではない。様々な問題を抱えているせいでもない。もちろん問題もあるのだろうが、一番の原因は、私たちに、自分たちにできることをしていこうという積極性や、生活を見直していかなければならないという危機感が足りていないということではないだろうか。

これは、簡単なことに聞こえるかもしれないが、実は一番難しいことだと思う。なぜなら、技術などは一部の人々の努力で向上していくが、意識は一部の人だけを変えたところでよくならないからである。一人ひとりが協力しようと思わない限り解決しない問題なのだ。

水についての課題は尽きることがないように思える。しかし目の前の課題から一つひとつ改善していけば、いつかはきれいな水が輝く社会が実現するのではないだろうか。

私たちは、今まで多くの水を無駄に流してしまった。それはもう変えようのない事実である。でも、未来は今からの私たちの手に託されているのだ。これからどうにも動かしていける。水に感謝し、大切にできるように町を、そして世界をつくっていくか。それは私たちのこれからに懸かっているのだ。

入選

曾祖父母のおかげで考えられる 熊本県

熊本県立玉名高等学校附属中学校二年 松本 海空

みなさんの家は市水だろうか。私の住む地域は市の上水道が通っていない。したがって、各家庭で井戸を持ち、生活を営んでいる。私の家もそうである。

私の家の井戸は、約五、六十年前に曾祖父母が手作業で掘ったものである。道具は、スコップだけで、水が出るまでひたすら掘ったのだそうだ。当時は今のようなボウリングなどの設備もなく、おおよその目安だけで掘り進めたのだそうだ。それでは水が出ない場合もあるのでは、と思う方もいらつしやるだろう。私も疑問に思い、聞いてみたところ、

「うちは山間部にあるから、だいたい場所には地下水がめぐっていたんだよ。」

と祖父が教えてくれた。

祖父の言うように、私の家は本当に山間部に位置している。そういつたことがあり、昔は豊富に水があったのだそうだ。したがって、井戸も深く掘らなくてよかったのだそうだ。深さも一般的な深さより浅く、当時の深さは約二十メートルほどだったそうだ。しかし、今、水不足もあつてか、井戸が日に日に浅くなってきている。

ある日、このようなことがあった。私が入浴しようと、おふろの蛇口をひねると、プスップスツと空気のもれる音がし、水が出てこないのである。渴水したのだ。私の家では、たびたびこの様なことがある。原因を考えると、朝から洗濯機を何回も回したり、花に水をやってたりしているうちに、気づかずに多くの水を使っていたのだと思う。また、ごくまにに祖父が水を止め忘れることがあり、多い時には、二〜三時間水が出しっぱなしということもあった。そのような時には、一日断水をするようになる。モーターを切っておくと、約一日で渴いた井戸に水がたまるのだ。このようなことがあると、水のありがたさを痛感する。

また、私の家の下には小川が流れている。山から下りてくる水だが、

一番上流ということもあり、水は美しく、にごっていない。川魚や沢などに生き物もたくさんいる。夏にはホタルが飛びかうほどの清流である。地域の人々は、この川をうまく利用している。田畑で仕事をした後の土汚れを洗い流したり、畑でとれた作物を洗ったり、時には車や農機具を洗ったりされている。生活の中になくはならない小川である。しかし、この小川も雨が降らない日が続くと、水が少なくなってしまう。田植えの時には、地域の人々みんなが、この小川から田んぼに水を引くので、水が不足すると困ってしまう。

私は、日頃節水を心がけているつもりである。しかし、こうして、日々の生活をふり返ってみると、けっこうな量の水をムダにしているということがわかった。市水の場合、水道費さえはらえば、蛇口をひねると水が出てくる。しかし、井戸水の場合、そうではないことが普通なのである。だから、私が節水をする時に思うのは、水道代が高くなるから節水するのではなく、渴水してしまわないように節水することだ。

熊本は、地下水が豊富だが、その地下水もいつまで使えるかは、わからない。私が生きていくうちには使えても、私の子どもたちの時代には、もうなくなっているかもしれない。大切なその資源を守り続けていくためにも、節水ということを心に留めておかななくてはならないと思う。もし、数年後、私の家も市水になる時が来たとしても、水道費のためではなく、渴水してしまわないようにと考える今の気持ちをずっと心に持つておきたいと思う。

入選

水が生み出すもの

鹿児島県 学校法人津曲学園 鹿児島修学館中学校三年

三好 紗理依

新茶の香りが漂い、八十八夜も過ぎると、溝辺の祖母は、田植えの準備を始める。田んぼの土おこしをして、田んぼにたくさんの水をため、また平らに土を均す。その間、種もみを水につけ、苗床の準備をする。全ての準備が整い、みんなで田植えをする。そして、炎天下で、雑草を引き、やつと秋に収穫できるのだ。祖母が作るお米は、どんな高いお米よりも、格別においしい気がする。

毎年、当たり前のように米をいただき、祖母からたくさんのように野菜ももらう。祖母に感謝するとともに、日本の自然の恵みに感謝していた。ある日、テレビの番組で、実は、日本も水不足であることを知った。

ご飯茶わん一杯の米を作るのに、およそ二七〇リットルの水が必要というのだ。二リットルペットボトルにすると、一三五本分にもなる。とてつもない水の量だ。水が必要なのは、植物だけではない。牛肉一キログラム生産するのに、六五四万リットルの水が必要だというのだ。子牛を育て、その母牛まで育て、その牛たちのえさとなる牧草まで育てるのに必要な量だという。

食べ物だけではない。鉄一キログラムを製造するのに、九五〇リットルもの水が必要なのだ。なぜ、そこまで使っているのかと、疑問に思うくらい、たくさんの水が当たり前のように消費されていることを知った。私たちが生きて行く上で最も大切な「水」。地球誕生にも水は不可欠だったわけで、アクアプラネットといわれるほど、海、川、湖が地球には存在する。だが、その水資源は限られたものでしかない。人々は、水がなくなることで、恐怖にさらされ、飢餓状態に陥るだろう。

以前、私は、世界のおよそ十八億人の人々が水不足にさらされていることを知った。世界の全人口の約二六パーセント、四人に一人は水に飢えているのだ。その中には、水のないことで、命の危機にさらされ、尊い命を、失ってしまうという現実があることを知った。また、限られた

水をめぐって、水の奪い合いが起こっている。

とうとうと流れる川、白く光る美しい滝、真っ白な雪景色。このような、風景を思い浮かべると、「日本は、水が豊かだ。」とつくづく思う。しかし、実際、今日本も、水不足になっているのだという。大昔に比べ、人口も増え、物を作るためにたくさんの水を消費しているのだ。また、生活が便利になることで、水を汚してしまうことが多くなり、汚水処理には多額の費用がかかっている。

限りある水資源であることを、一人一人が認識し、いかに少ない水で生産活動をするかを考えなければならぬ時である。

限りある水資源を無限に、持続可能な資源にするためには、私たちは、自然が再生する力やそのスピードを考慮しながら、人が資源を利用する量、スピードを考えて管理していかなければならないと思った。

私は、水に、直接的に働きかけていることと、間接的に働きかけていることがある。直接的には、無駄な水を使わないことだ。歯磨きやお風呂では、こまめに水を止め、家族みんな、同じ時間にお風呂に入るなど、節水に努めている。月に換算すると、庭の散水などの工夫もあり、三から五トンの節水となった。間接的には、水を出るだけ汚さないように心掛けることだ。飲み残しはないよう、皿に残った汚れは、洗う前に拭き、食器はまとめて洗い、泡の少ない洗剤を使うなど、家族で心掛けていく。

また、自然が浄化する能力を多大に発揮できる環境作りも、とても大切だと感じた。川の水をきれいにし、小さな生物が生きる森を育て、それが豊かなプラנקトンを生み、海の生物も育ち、地球全体の水資源保護につながると思う。

入選

命の種

沖繩県 宮古島市立砂川中学校一年 源河 千春

私たちのふるさと沖縄県は、昔から「水」を得るために様々な苦労があったそうです。

雨水をためたり、井戸や湧き水を大事に利用するなど、昔の人々は工夫をして水を得ていました。

私が住んでいる宮古島でも、同じように苦労があったといえます。山のない平たい島なので川がなく、島全体をおおっている、サンゴが元になつてできた石灰岩によって、降った雨のほとんどは、地中にしみこんで海へ流れていきました。私の祖母の家の近所には、深さ二十メートルほどの洞くつの中の湧き水、「あまがー」があります。一度、あまがーの中に入つてみたことがあります。暗くて、下に降りるまでの石段がとてもすべりやすかったことを覚えています。手すりもないので、壁で手を支えて上り下りをしていたらしく、すりへつている所もありました。水くみは、子どもたちや女性の毎日の仕事で、毎日何度も、繰り返しやっていたことを想像すると、水がどれほど貴重なものだったのかを考えずにはいられません。暗い洞くつの奥で大切に守られ、長い間人々の命の源であったその湧き水は、まるで宝物のようでした。飲み水に限らず、農作物にも水は必要不可欠です。干ばつにも多く苦しめられた島の人々にとって、水は、私たちが考える以上に、大切な「命と命をつなぐもの」であるということが感じられました。水が当たり前に入る環境の中で暮らしている私たちの中で、生き物が生きるために、水は欠かせないことを意識して暮らしている人は、決して多くはないと思います。身近にあるものほど、その大切さに気づいていないのです。地域の大切な水源だった「あまがー」から、「水」を意識し、水を大切にすること、という事は、どういうことなのか、考えるようになりました。

また、小学生の頃、社会の授業で、水について学べる機会があり、福里地下ダムを訪れました。地下ダムは、水をためておくことのできない

島の地層を利用した、地下水を有効に利用する方法です。その時に私たちが使っている水が、地面の下を通っているということを知り、とてもおどろきました。そして多くの人が関わっている農業に大きな影響を与えていると知りました。水は、私たちが食べる農作物を育てる時も、大量に使われているのです。私たちの豊かな生活は、いろいろな場面で水に支えられていることに気がつきました。地下ダムは、目で見ることができないけれど、島のすべての人とつながっていて、農家の方が、収穫する喜び、動物や植物、人間が生きている喜びなど、すべての喜びも、水がつくつてくれていると思います。

私たちは、そんな「水」の恵みに対して、どんなことができるでしょうか。まず一つは、水があることを、当たり前と思わずに節水を心がけることです。流しっぱなしや、使う時間を一分短くするだけでも変わると思えます。水は無限にあるものではないということを、一人ひとりが意識することです。二つ目は、環境を守ることです。宮古島は、不法投棄がとても多いと聞きます。不法投棄されたゴミの中の有害な物質は、地下にそのまま浸透し、地下水を汚してしまいます。汚れた水は、必ず私たちの元にもどってきます。私は、不法投棄を許さず、自分自身も小さなゴミでも拾うように心がけ、エコ活動に取り組んだりしたいと思っています。環境を守り、水を守ることが、命や生活を守ることにつながっていると思うからです。

人々は水を求めて、水の近くに集落を作り暮らしてきました。水は、生活を支えているだけでなく、水があるからこそ命が生まれる、はじまりの場所となる、命の「種」のようなものだと思います。その種が、美しい花を咲かせるように、大切にしていきたいです。水の未来は、私たちに託されているのだから。

入選

地下水の恵み

沖繩県 宮古島市立伊良部中学校三年 上里 珠里

私の住む伊良部島は、宮古島を本島とするさらに海を隔てた離島です。その伊良部島と宮古本島を結ぶ伊良部大橋がやがて完成します。島と島がつながることによって、宮古本島にある地下ダムの「水」が橋を渡り、伊良部島にも届けられるようになるそうです。サトウキビを作っている私の祖父と祖母は、その事をとても喜んでいきます。

「水」を求めて、島に住んでいる人たちが、昔から苦勞してきたことは、祖父母の話から何度も聞いてきました。農業に使う水だけでなく、生活に使う水も、私達の島では、あたり前にあるものではなく、貴重な限られた資源として求められてきたことを祖父母の話の中から教えてもらうことができます。

伊良部島には現在、雨水を集める集水池があり、水をトラックで運び畑にかん水するため一日に何回も往復しなければなりません。その仕事は、とても骨の折れることだと祖父は話していました。しかし、そのため池の水だけでは足りなくなる日も、多いそうです。干ばつになると、さらに水は足りなくなります。サトウキビなどが、立ち枯れていく様子を見ているだけで辛い気持ちになり、生活への不安も深刻になってくるとの事でした。そのたびに農家の人たちは、被害を受け、厳しい生活を何度も経験してきたのです。

すぐ隣の宮古本島では現在、地下ダムの水によって、一年中、ハウスや畑で水を使うようになっていきます。野菜や果樹の栽培がとも増えたそうです。「水の力」によって生きる力を発揮し、すくすくと育っていく畑の作物たち。私は改めて、水が生きていくために必要なかけがえない資源であることを考えさせられました。私たちが一日に何回も飲み、毎日のように使っている水。特別に意識して水のことを考えた事はありませんでしたが、なくてはならない大切なものだと思えるようになりました。

私の祖父は兼業農家です。家で理容業を営みながら、農業での収入も得ています。伊良部島では、兼業で農家をしている家庭が他にも多くあります。生活していくためには、不安定な農業による収入だけでなく、出かせぎに行くことも必要だったのだと、少しずつ理解できるようになってきました。

農業用水管を取り付けた伊良部大橋の完成によって、伊良部島の農家の人たちが育てる畑の作物に、十分なかん水ができる「水」が送水されてくる日を待ち望んでいるのは、私の祖父だけではありません。島の農家の人たちも同じ思いでいるのです。

宮古本島の地下ダムの水を橋でつなげて、伊良部島のすみずみまで届ける計画を知って、私はとても感動しました。生きるために必要な水を分け合って大切に使うというふうにするつながらる思いを感じたからです。

このような夢のプロジェクトを支えているみなもとは「地下水」です。私たちの住んでいる島は、山も川もなく平らな地形で、水資源は百パーセント地下水に頼っています。しかし、その地下水が汚染されつつあるという問題も島の住民たちが直面している重要な課題です。生きていくために必要不可欠な水が汚染されてしまわない前に今、私たちが何かできることがきつとあるはずですよ。

地下水の恵みによって生きている私たちが自分たちの生活優先のために、かけがえない水の循環を汚してしまつたなら、その見返りがいつか自分たちにやってくるかもしれないのです。安全な水が守られていく環境が、私たち人間にとっても生き物たちにとっても一番良い環境だといえるのではないのでしょうか。限られた資源である「水」を大切に分かり合って使う生き方が、「水の惑星」といわれる地球を守ることに繋がっていくのだと思います。

入選

節水しよう！

オーストラリア連邦

メルボルン日本人学校中学部一年

北村 祥子

水がなかったら困ること。それは、たくさんあると思う。二〇一一年六月ごろ、私が住んでいた千葉県我孫子市の近くに流れる利根川に、有害な物質が入っていたため、断水になりそうになった。結局、断水にはならなかったが、断水に備えて準備をした。

「トイレに水を流せないから、お風呂に水をためておこう。」

「水が飲めないから、お風呂に水をためておこう。」

「水が飲めないから、お湯をわかしてポットに入れておこう……。」
などと色々考えた。そう考えたことで、水がなくなるととても不便になる、ということを知ることができ、良い経験になったのではないかと私は思う。

また、私が住んでいた我孫子市には、手賀沼という沼がある。私が小学生のとき、手賀沼について調べたことがあるのだが、その時、「今はそんなに汚くないけれど、一九九五年ごろ、つまりあなたが生まれる六年ぐらい前に、手賀沼は日本一汚い沼、になってしまったんだよ。」

と、母が言っていた。それから何年間か、その状況が続いたそうだ。生活排水と工業排水を流したため、ヘドロはたまり、水はにごり、魚が死に……。たくさん被害があったらしい。しかし、市民も少し気をつけて生活するようになり、二〇〇一年、つまり私が生まれた年、ついに最下位から脱出した。

さらに、最近私は、インターネットで、水道水を飲める国が、世界でわずかか二十ヶ国前後しかないことを知った。このことを知った時、私はとてもおどろいた。なぜなら、日本では当たり前のように、水道水を飲んでいるからだ。水不足のため、子供が死んでしまったりしてしまう国も、たくさんあるらしい。日本では、そんなこと絶対にならないのに、どうしてなんだろう。もしかしたら、私たち人間が、水を使いすぎているのかもしれない。

だから、水は人間や動物、植物にとって、なくてはならないものということ、自分たちの国では当たり前のように使っている水も、他国ではとても貴重で、大切に使っている、ということをおぼろげに忘れてはいけないと思う。私たちは、そのことをきちんと理解した上で、そのためにどうしたらよいか、自分には何ができるのか、を考えていかなければならない。水道の蛇口を、水を使っていない時は止める、油などはあまり流さないようにする、水不足の被害にあっている子供たちを助ける募金に協力する……。そんな小さなことでもいいから、一人一人が心がけて、水を大切にして生活すれば良いのではないかと私は思う。私も、やたらと水を使わず、今、水の節約の仕方について、調べたり探したりしてみたいと思う。オーストラリアは、水が豊富な国、とはいえないので、色々な節水の仕方があるかもしれない。そして、その結果と日本のやり方を比較して、どこが違うか、どんなところがよいか、を見つけて、日々の生活に生かしていきたいと思う。

今、オーストラリアは、冬に向かっている。私の住むメルボルンは、この時期、とても雨が多い。私の家の庭には、一辺が二メートル近くの正方形の雨水タンクがあり、ためた雨水を、トイレの排水などに使っている。日本にこんな大きな雨水タンクを置いていたら、庭の面積がせまくなる。もしかすると、これもオーストラリアならではの節水の仕方かもしれない、と私は思った。

8月1日～7日は「水の週間」、8月1日は「水の日」です。



水について考えよう!!

第35回全日本中学生 水の作文コンクール

皆さんは、普段使っている水がどこからきて、使用後にどこに流れていくのかわっていますか？
普段、当たり前のように使っている水ですが、実は知っているようで知らないことが多いと思います。
この機会に、水についての理解を深めるとともに、皆さんが暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、
両親、先生から学び聞いた話などをもとに、水についての考えや今後の水の使い方についてまとめてみましょう。

募集案内

メインテーマ

「水について考える」

提出先と締切日

〔国内〕

提出先：各都道府県の水資源担当部局

締切日：上記担当にお問い合わせ下さい。

〔海外日本人学校〕

提出先：国土交通省水資源政策課

締切日：平成25年6月14日（金）

原稿（記載要領）

○400字詰原稿用紙4枚以内の個人作品

○題名、学校名、学年、氏名、を明記

表彰

- 国土交通大臣賞（最優秀賞） 1名
 - 全日本中学校長会会長賞（優秀賞） 1名
 - 水の週間実行委員会会長賞（優秀賞） 1名
 - （独）水資源機構理事賞（優秀賞） 1名
 - 国土交通省 水資源部長賞（優秀賞） 1名
 - 全日本中学生水の作文コンクール
中央審査会特別賞（優秀賞） 1名
 - 佳作 約30名
 - 入選 約100名
- （最優秀賞と優秀賞の受賞者は8月1日「水の日」に
国土交通省にご招待し、表彰式を行います。）

入賞発表

平成25年7月中旬

主催

国土交通省
都道府県

後援

文部科学省
全日本中学校長会
（独）水資源機構
水の週間実行委員会

【問い合わせ先】 国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部 水資源政策課 TEL 03-5253-8386（直通）（<http://www.mlit.go.jp/>（「水の日」と検索））

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（平成25年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ年齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・平成25年6月14日（金）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
 - ⑥ 版权等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査 応募作品18,191編のうち、各都道府県の地方審査を経た121編及び海外日本人学校より送付された71編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる33編を選出。平成25年7月10日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞5編及び入選27編あわせて33編の入賞作文を決定

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	国土交通大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞	賞状、副賞
優秀賞	全日本中学校長会会長賞	
優秀賞	水の週間実行委員会会長賞	
優秀賞	独立行政法人水資源機構理事長賞	
優秀賞	全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成25年8月1日（木）に国土交通省にて開催された水の週間関連表彰式において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

- 秋本 佳則（国土交通省大臣官房審議官）
- 井上 久夫（独立行政法人水資源機構理事）
- 須田 淳一（全日本中学校長会編集部部长）
- 須磨 佳津江（フリーアナウンサー）
- 長崎 宏子（スポーツコンサルタント）
- 松明 淳（社団法人日本水道協会調査部長）

5 主催者等 主催：国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	おのおの すずか 大野 涼華	さとう たいが 佐藤 大河	すがわら あい 菅原 亜伊
2	青森県	たなか とき 田中 斗機	まつしま かほ 松嶋 花歩	やまだ ゆうか 山田 祐華
3	岩手県	☆ すずき あや 鈴木 綾	ほんま あかり 本間 朱莉	さいかわ みずき 才川 瑞季
4	宮城県	さとう こう 佐藤 幸	ひらま たつや 平間 達也	たかはし こうき 高橋 幸希
5	秋田県	こうきか あやか 幸坂 彩花	あらい ひいと 與齊 英誇	すずき りこ 鈴木 莉子
6	山形県	—	—	—
7	福島県	○ あんざい まゆ 安齋 茉由	○ たきゆう みき 田久 実季	○ まお ゆうは 真尾 結羽
8	茨城県	いちかわ かずと 市川 和人	◎ かとう たいが 加藤 太河	○ うすい まい 薄井 舞
9	栃木県	ふるうち のぞみ 古内 希	まつもと なおき 松本 直樹	わたなべ こうき 渡辺 向輝
10	群馬県	おかもと い 岡本 留依	かわだ まりな 川田 真里奈	とまる えり 外丸 絵理
11	埼玉県	○ おおま かりな 大間知 莉奈	うえまつ かのり 植松 香音	おおいし こうせい 大石 昂生
12	千葉県	いちかわ つかさ 市川 つかさ	いわさわ さほ 岩澤 紗穂	たか ありさ 高瀬 有沙
13	東京都	おくだ ゆうき 奥田 裕紀	さとう ちさき 佐藤 千咲	かとう ななえ 加藤 奈々絵
14	神奈川県	○ おおつち みほ 大塚 美徳	おくら しほ 小倉 史帆	やまぐち なつき 山口 夏季
15	新潟県	○ いかわ 遥喜 井川 遥喜	○ ふせ わかば 布施 新葉	やまかわ ひろむ 山川 大武
16	富山県	しおたに ゆうた 塩谷 優太	にしほ みゆき 西保 未由希	つりたに あみ 釣谷 亜未
17	石川県	なかにし かいと 中西 海斗	しもで さいか 下出 采果	たけき たかし 竹崎 天山
18	福井県	—	—	—
19	山梨県	○ おだいら しゆり 小平 守莉	やまもと はると 山本 遥斗	—
20	長野県	ばく 唯華 朴 唯華	—	—
21	岐阜県	あさの なる 浅野 瑠菜	やまぐち わかな 山口 和花菜	—
22	静岡県	◎ もりた ちゆ 森田 千冬	こしま しん 小嶋 心	しおや ゆき 塩谷 有紀
23	愛知県	やまもと たいせい 山本 大聖	すずき まひろ 鈴木 万絢	はら まいか 原 舞花
24	三重県	うえの や 上野 友	○ すみた いすず 隅田 五鈴	くめ はし 久米橋 奈々
25	滋賀県	○ これとう ひな 是洞 光南	なかの かな 中野 花菜	うの ひかり 宇野 ひかり
26	京都府	○ おかもと みい 岡本 みい	○ さくらい もえ 桜井 萌	○ わたなべ ゆりな 渡邊 優里菜
27	大阪府	○ いまがわ けい 今川 結帆	かじお あや 梶尾 綾	まるやま えみ 丸山 恵実
28	兵庫県	○ なげし れん 投石 萌	たきぐち ちえり 炬口 ちえり	こうめい こういちろう 小梅 浩一朗
29	奈良県	○ こや かなこ 小屋 香菜子	◎ さらたに すばる 更谷 昂	まえで あゆみ 前出 亜由美
30	和歌山県	くわの みつか 桑野 光加	さかきばら なつは 榊原 夏葉	ふるた ゆうき 古田 夕貴
31	鳥取県	—	—	—
32	島根県	おのうえ みずき 尾上 瑞季	—	—
33	岡山県	—	—	—
34	広島県	たにくち さな 谷口 紗那	おかだ れおん 岡田 怜恩	とのきこ けんたろう 殿迫 謙太郎
35	山口県	○ おかわら ちさと 岡村 智聖	やまむら ありさ 山村 亜理沙	しのはら ゆりか 篠原 ゆりか
36	徳島県	◎ かわた み 川田 美央	○ たに ゆうは 谷 結羽	ひがし ますほ 東浦 瑞歩
37	香川県	○ おおつち りほ 大浦 理芳	たかき ちほ 高木 智帆	た ますひろ 田 昌弘
38	愛媛県	ふじた りの 藤田 梨乃	てら みる 寺原 みる	と いも 土居 もも香
39	高知県	ながの ようこ 永野 陽子	—	—
40	福岡県	ひめの り 姫野 実乃里	はなだ ゆうき 花田 悠希	いのえ まゆ 井上 間結
41	佐賀県	つづみ けんじ 堤 健司	くまがい みお 熊谷 みお	なかしま あい 中島 愛水
42	長崎県	○ ゆきの あかり 雪野 明里	○ すえなが うたの 末永 詩乃	のぐち あかり 野口 あかり
43	熊本県	せりぐち みな 芹口 美那	や の さくら 矢野 さくら	○ まつもと みく 松本 海空
44	大分県	なかぞの すずか 中園 涼花	かじかわ あすか 梶川 明日香	○ 岡田 あむ 岡田 亜武
45	宮崎県	とくなが まりん 徳永 万琳	くろぎ よの 黒木 愛乃	はなおか ちえか 花岡 知恵香
46	鹿児島県	○ みよし さりい 三好 紗理依	くすの せれい 榎瀬 礼	しもぞの れい 下園 れい
47	沖縄県	○ げんか ちはる 源河 千春	○ うえざと じゆり 上里 珠里	なかもり はるな 仲盛 はるな
48	海外	◎ 園田 かのん 園田 かのん	○ きたむら しよこ 北村 祥子	—

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選、その他は佳作

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	3	11	167	23	84	60
青森県	3	7	388	115	107	166
岩手県	3	9	162	58	16	88
宮城県	3	3	3	1	1	1
秋田県	3	1	29	11	9	9
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	3	10	127	9	59	59
茨城県	3	11	711	134	306	271
栃木県	3	8	612	110	234	268
群馬県	3	7	616	92	258	266
埼玉県	3	8	204	81	51	72
千葉県	3	6	492	268	1	223
東京都	3	6	142	12	12	118
神奈川県	3	16	1,065	668	259	138
新潟県	3	8	80	18	32	30
富山県	3	7	990	112	446	432
石川県	3	4	112	2	0	110
福井県	0	0	0	0	0	0
山梨県	2	2	2	1	0	1
長野県	1	1	1	1	0	0
岐阜県	2	2	2	0	1	1
静岡県	3	7	209	11	12	186
愛知県	3	12	333	74	104	155
三重県	3	9	721	271	379	71
滋賀県	3	11	1,121	428	284	308
京都府	3	5	578	367	118	93
大阪府	3	7	1,016	292	649	75
兵庫県	3	8	579	104	152	323
奈良県	3	6	84	21	34	29
和歌山県	3	11	534	138	151	245
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	1	1	1	0	0	1
岡山県	0	0	0	0	0	0
広島県	3	4	226	58	100	68
山口県	3	4	27	11	11	5
徳島県	3	6	26	5	11	10
香川県	3	19	85	48	36	1
愛媛県	3	25	424	4	325	95
高知県	1	2	5	1	2	2
福岡県	3	9	548	37	266	245
佐賀県	3	1	56	0	56	0
長崎県	3	12	722	196	196	330
熊本県	3	39	4,420	1,535	1,639	1,246
大分県	3	1	28	28	0	0
宮崎県	3	10	91	59	26	6
鹿児島県	3	8	227	76	104	47
沖縄県	3	16	154	59	36	59
海外	2	8	71	25	35	11
合計	123	368	18,191	5,564	6,602	5,924

※滋賀県のうち101名は学年不明

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数	応募 総数	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
合計		16,511	435,364			152,890	152,194	130,176

- (注) ・ 第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・ 第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・ 第35回においては学年未記入者101名を学年別集計から除いている。

第35回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品18,191編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞5編の受賞者の表彰式は、平成25年8月1日（木）に国土交通省にて開催された水の週間関連表彰式において実施されました。



太田 昭宏 国土交通大臣を囲んで記念撮影



太田 昭宏 国土交通大臣より表彰を受ける
岩手県 滝沢村立姥屋敷中学校2年 鈴木 綾さん（最優秀賞受賞者）



国土交通省

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>